

韓日古代苑池の変化からみた九黄洞苑池の性格研究

朴 琬 貞

- I. はじめに
- II. 韓国における主要苑池遺跡の検討
- III. 日本における主要苑池遺跡の検討
- IV. 九黄洞苑池の性格
- V. 考 察

要 旨 韓国の古代庭園遺跡の全般的な流れに対しては研究が進められてきたが、詳細な形式変化の検討を試みた例は大変稀である。これは、発掘された遺跡が多くないという理由もあるが、庭園遺跡がもっている多様性のためであるように思う。多様性の原因としては、仏教、道教、神仙思想など、当時の社会を風靡した哲学的な思想と庭園を美しく造りあげようとする造成者の感性、そして苑池が位置する地域の地形と風景をあげることができる。もちろん、その感性と趣向は当時流行した思想の影響を抜け出すことができないだろうが、庭園遺跡が同時代に多様な様相を帯びていることも、このような理由のためである。多くの遺跡が発掘された日本の古代庭園の場合にも、方池を除外した曲池の場合は、いくつかの共通項を除き、多様な形態をみせている。韓国の古代苑池は、早い時期から方池と曲池が同時にあらわれている。高句麗と百済は、方池の比率が高く、新羅は曲池の比率が高い。曲池は外形が華麗なために、主に宮、王室関連寺院などのような重要な建物群として採用され、方池は造景用もあるが、主に宮、山城などで貯水のため使用されたり、寺院内の影池として採用されたりしたものとみられる。日本の場合、飛鳥時代には百済の影響を受けた方池が主流で、噴水施設や石造物などで方池内部を造り、造景の視野が方池内部に集中するように促した。一方、韓国の場合は、周辺の自然と調和をなす造景の視野が苑池内部から周辺景観までを含む、より広い視野をもっていた。日本も奈良時代になると方池はなくなり、曲池一色になり、自然風景へと変わっていった。九黄洞苑池は、このような苑池の変化の中で水路が強調されるという特徴をもつ形態として捉えることができ、最近発掘調査された百済王宮里遺跡と、日本の飛鳥時代の苑池の一部もやはり同じ脈略で把握しなければならないと考えられる。

キーワード 九黄洞苑池 庭園 六角形遺構

I. はじめに

現在まで韓国国内で行われてきた古代苑池に対する研究は、苑池そのものというよりは、苑池を構成している庭園に対する造景、または建築的な観点からのアプローチが中心であった。むしろ、発掘調査で検出された苑池そのものに対する考古学的検討は、発掘調査報告書に収録された内容に過ぎず、調査された遺構に対する解釈というよりは、出土遺物に対する検討をとおした时期的な流れや、苑池遺跡間の編年作業が行われてきたことが現実である。苑池に対する研究がまだ十分でない上述のような点に対しては、もちろん発掘調査された苑池遺跡の数が少なく、この中で報告書が発刊されていないままの状態や、または発掘調査が全面的に行われていないなど、遺跡全体の状況を考察して論議するのに無理がある点も事実である。しかし、発掘調査報告書が刊行されても、報告者の視点によってその内容に差異があり、報告書の内容の粗略などのために、調査者ではない第三者が苑池遺跡の全貌を検討して考察するには役不足なことが現実である。

幸い、去る1999～2004年の間、国立慶州文化財研究所による発掘調査が行われた九黄洞苑池遺跡は、これまで行われてきた苑池関連研究に新たな突破口を提供する点で重要な意味を持つ。特に、造景や建築的な面以外にも、周辺遺跡との有機的な関係の中で苑池の機能を考慮することができる資料が確保され、時期別の苑池の運営による修築作業と管理方法などを検討することができる内容を調査することができた。特に、これまで調査されたさまざまな苑池遺跡で不明確に確認された部分に対して、補充する資料が確保された点で重要な意味を持つ。よって、いまだ不十分ではあるが、これまで報告された苑池遺構を中心に取り上げ、九黄洞苑池との空間構成をとおして、その性格を比較することとしたい。

研究対象は、苑池という性格に符合する遺跡とする。単純な貯水用であったり、集水施設、とくに山城で確認される池などは、その役割を考慮すれば生活用水を調達するための目的が主であり、造景的な性格は皆無であるものとして、苑池の対象からは除外することとした。しかし、貯水施設として使用したと言っても、造景的機能がかった遺構は検討対象に含めて詳細な検討をおこなうこととする。

II. 韓国における主要苑池遺跡の検討

1. 高句麗

(1) 安鶴宮池

安鶴宮は、長寿王十五年(427)、高句麗が首都を国内城から平壤へ移して造営した4番目の宮城として、平壤市大城区域安鶴洞の大城山蘇文峰南麓に位置する。城郭の一辺長は622mであり、総面積は約38万㎡である。調査結果から、安鶴宮内には多数の苑池が残って

おり、宮内に等しく分布していることが確認された。安鶴宮内の苑池は、曲線形と方形、大きく二つの類型に分けられる。代表的な遺構を検討してみよう。南宮の西辺の回廊に連結する付属建物前に位置している苑池は、平面形態が東西に長い落花生模様であり、その長さが100mにいたる。景石が点在しており、苑池の北方に隣接した建物の規模で見れば、宴会および共有の空間として利用されていたものとみられる。安鶴宮の東南端には、一辺が70mにわたる大形方形池が検出された。深さは1.5～2.4mで、床面は20cmの厚さで粘土と小石で基礎をなし、その上に粘土を10cm程度の厚さで固めていた。そのほかには東宮前面と北宮内に、一辺10～20mの長さの方形池があり、中宮回廊外側には一辺6.7mの小形方形池があったことが報告されている。報告内容によれば、石積の痕跡が残っていたということから、護岸は垂直にたちあがる石積の形態であったと推定される。

(2) 大城山城の池

大城山城は平壤市に位置する高句麗山城として、4世紀末から5世紀初に平壤地域を防衛する目的として建てられた。安鶴宮へ遷都した後は、王宮を守る役割を担った。

(3) 真珠池（定陵寺址西辺苑池）

定陵寺は高句麗盛行期の寺院として、平壤市東南側へ22km離れたカ浦区域龍山里にある。真珠池は、寺址の西方へ約400m離れた低い貯水池に位置している。平面形態は隅丸方形に近く、南辺115m、東辺75m、北辺90m、西辺70mである。苑池の深さは、5.4mを測り、土盛護岸である。苑池内部には4基の島を造成しており、島の直径は12～16m程度である。床面には砂利を敷き、入水口は西北側に、排水口は東南側に位置する。

真珠池は、池内部から炭化した蓮の種子と「定陵寺」銘の瓦が出土した点、『東国輿地勝覧』によれば、東明王陵を真珠陵と呼んでいたという点などから、寺院の主要出入口に配置された影池の可能性が提示されている。このことから寺苑池として推測されることもある¹⁾。また、苑池内に渡橋または神仙思想的な性格が強い島が造成された点を理由として、寺苑池よりは安鶴宮とは異なる離宮の宮苑池としてみる見解もある²⁾。

2. 百 濟

(1) 扶餘官北里苑池

忠清南道扶餘郡扶餘邑官北里に位置し、扶蘇山の西南辺の麓にあたる。官北里遺跡は百濟泗泚期の王宮地として比定される場所で、現在までの10回にわたる発掘調査をとおして、王宮に関連した多様な遺構と重要な遺物が出土した。苑池は1982年～1983年にわたって、忠南大学校博物館の発掘調査で確認された。

苑池は、現在の国立扶餘文化財研究所前面に位置する傾斜面から確認された。平面形態は長方形で、東西10.6m、南北6.2mである。護岸は垂直に積まれた石築で、人工的に加工された割石を使用し、主に長手方向に積み上げている。苑池の深さは1～1.2mである。苑池

第1表 大城山城の苑池

号数	位置	平面形態	規模	床面施設	特徴
1号	長寿峰 南側谷間	長方形	東西 37m 南北 34m 深さ 1.1m	砂利を敷く	角石は大変大きなものを使用 池の外郭から中央へ向かって傾斜をも ち池中央が深くなるようにする 池の周辺に東屋を置く
2号	長寿峰 南側麓	円形	直径 18m 深さ 1.1m	石を敷く	入水口に小さな石の築山を設置-浄化用 4層護岸-梅雨期に水が一斉に入っ てこないように、また浄化用
3号	長寿峰 南側谷間	長方形	東西 20m 南北 25m	石を敷く	池の隅は円形に処理 4層護岸
5号	長寿峰 南側谷間	長方形	東西 15m 南北 16.5m		
6号	蘇文峰 頂上	長方形	東西 42.5m 南北 10m		2段護岸 入水口に石の小山を設置
7号	蘇文峰 頂上	二等辺 三角形	各辺 15m、 8m、8m		護岸の東側隅が切断されている 池の北方には石垣（幅120cm、高さ30～ 40cm）を設け、水が流れ込むのを防止
10号	乙支峰と 長寿峰間 の谷間	長方形	一辺 18.2m	粘土基礎	護岸-石築18段、高さ3.9m
16号	大城山城 谷間の中心	円形	直径 14.6m 深さ 3.3m		護岸-20～40cmの大きさの石を城壁築 造手法として積み上げる 池の西南側に排水口 池の周辺に東屋があったと推定

北辺に2列の石列と瓦を利用した入水施設があり、排水施設は確認されていない。苑池の東側と南側では、一定の間隔で列をなす木柱の列が確認されており、苑池と関連した施設と推定される。苑池の床面では、蓮の茎や根が確認され、百濟時代の造景施設と推定されている。

(2) 益山王宮里苑池

王宮里庭園は、講堂址の北側にある東西石積4の東側末端部に位置する。石積の高さを活用し、板石で外郭を区画し、内部には景石と床面に川砂利を敷いている。石積の北側から流れ込む水を一時的に堰き止め、流し込む小規模な苑池である。北側から水が流入する部分は、扁平な板石状の塊石を置き、東側と南側には長大な石を立てて、仕切りを設けた。仕切り施設をみると、庭園の中心空間は3.2×2.8mに推定される。北側の入水部側は、有機物層があることから、木筒で水を引き上げていたものと推定しており、苑池の南東隅から南側へ排水路の床面と推定される遺構の痕跡があることをみると、排水施設と考えられる。王宮里苑池は、ほかの苑池遺跡とは形態的に差異があるが、造景と関連した庭園遺跡であることは明白である。植施設と床面に敷いた川砂利は、水が流れることで生じる床面の凹凸を防止するのはもちろん、砂利と水のぶつかる音まで念頭に置いているため、水路形庭

園遺跡とみななければならないだろう。また、この庭園遺跡と連結する苑池遺跡が今後発見される可能性が高いであろう。

3. 新羅

(1) 月池

新羅の宮城である月城の北側に位置し、東宮に該当する場所である。1975年から1976年まで、文化財研究所古跡発掘調査団によって発掘され、東西200m、南北180mの範囲に「冫」字形態の不整形な苑池と、苑池に接する南西側で建物址群が確認された。月池は直線と曲線が調和をなす護岸として有名であり、船着場と苑池に繋がれた船が発見された。

苑池の西岸は、壁石が建物の基壇の役割も兼ねているために直線的で、南岸は直線的ではあるが若干緩やかな方である。東岸へ行くほど護岸は曲線を呈し、西側へ突出する2基の半島があり、北岸へ至る北東隅は深い湾の形態をなす。北岸は西側の直線的な護岸が緩やかにのび、さらになだらかな屈曲をなしている。護岸の屈曲がある東北側には、假山が造成されて、苑池内部には3基の島が位置する。

護岸はすべて垂直に積み上がる石積をしており、加工した石材を使用している。池の床面は厚さ50cm前後で、粘土と砂利を混ぜて石灰を敷き詰め、その上に砂と黒色の砂利を敷いた。池の中央には、水草を繁殖させるための一辺120cmの長方形の木材枠がある。

3基の島は、大きさによって大・中・小に区分される。

大島は苑池内南側に位置しており、屈曲をもつ楕円形の形態をなす。規模は東西51m、南北30mであり、護岸石積の周囲が139m、面積が1,049㎡である。護岸石積の高さは1.7mであり、石積上から3.5mの高さまで傾斜しながら積み上がる小さな築山の形態をなしている。

中島は苑池の北西側隅に位置しており、護岸に屈曲をもつ不整形の平面形態をしている。規模は東西33m、南北30mであり、護岸周囲は111m、面積596㎡である。護岸石積の高さは1.6m前後であり、石積上からさらに2.9m程高くなり、小さな築山の形状をなす。

小島は苑池の中心部に位置しており、発掘当時、堆積土の中に完全に埋没していた。平面形態は楕円形をしており、規模は長軸8.5m、短軸5.5m、護岸周囲30m、面積60㎡である。護岸石積の高さは1m程度が残存しており、島の上には自然石を多く置き、まるで石の島のようにみえるように造成した。

三つの島には多孔質の石が多数置かれ、島と護岸石積の上段に景石が集中的に配置されている。苑池に使用された景石は、相当数がホルンフェルスである。

入水口は東北隅に位置し、外側から直線的な水路が二回折れ、2基の石組に連結し、再度石組から曲線の形態をなす水路に連結し苑池へと続いている。出水口は北岸に位置し、そこには水位を調節する特殊施設があり、長大な石を積み上げた石溝や木材水口などで構成されている。築造年代は発掘当時「儀鳳四年皆土」銘文が印された瓦が出土し、新羅文武

王十四年(674)に推定されている。

(3) 国立慶州博物館敷地内苑池

1974年、新築の国立慶州博物館駐車場敷地内に対する発掘調査により、敷地の東北側隅で確認された。池の平面形態は、東西に長い月城を模したかのような三日月形で、長さ15m、幅5m、深さ1.3～2mの規模である。護岸は石積で、苑池内には南北方向に堤が二箇所あり、池を二等分している³。東側の堤の幅は2m、西側は0.9mであり、堤の両側は河原石を積んでいる。苑池の床面は、地山上に10cm以下の川砂利を敷いている。床面は南側から北側へ傾斜していき、南側床面の端は南壁と接しており、長い溝が設けられているという報告から、南側の長い溝が入水部であったことを推定できる。しかし、堤によって分けられた側の池に水がどのように流れていたのかに対しては報告内容がなく、その状況を知ることはできない。堤の下部に、暗渠施設などがあったのではないかと推定するのみである。

池の南側には人工の築山があったとしているが、現在博物館正門の両側にある小さな小山がそれにあたる。よって、この苑池は築山を備える庭園遺跡であったということが推定され、最近博物館の位置が南宮として比定されていることとあわせて、この苑池が南宮に属する庭園遺跡であった可能性も同時に想定することができる。三国時代末から統一新羅初期に比定されている。

(4) 龍江洞苑池

龍江洞苑池は慶州市の北側に位置し、行政区域上、隍城洞と龍江洞の境界にある。1998年に嶺南文化財研究院による発掘調査が行なわれ、苑池の一部と道路遺構などが確認された。

苑池は、南北方向に長い隅丸の平面形態を持つものと推定されるが、北側が確認されておらず断定することはできない。南岸の長さは33m、東岸38.6m、西岸が65mである。調査地域内からは、苑池内部に人工島が2基確認された。この人工島は南北に配置されており、北側の島は南岸側からごく一部が検出された。

苑池と島すべての平面形態は、隅丸方形を呈しているが、苑池の護岸は屈曲が緩やかな方で、南側の島の護岸は屈曲が強い。苑池の護岸は、川原石や水中にある川砂利と、若干の加工を加えた長方形の割石を利用し、垂直に近い角度で築いている。残存高は80cm前後で、石積が5段残っており、遺失が激しい部分は残存高20cm前後、石積は1段程度が残存している。西岸部分は南側の島と一定間隔を保ち、緩やかに続き、島の北側で島を取り囲む苑池内部へ湾入し、再度緩やかに北側へ続く。このような形態によって、西岸の突出部は、二つの島を境界にしなが苑池を二分する印象を与える。これは、九黄洞苑池と類似する様相として把握される⁴。東岸と南岸すべて、直線に近い緩やかな曲線の形態をみせている。

南側の島は規模が南北25m、東西20.5mであり、平面形態が隅丸方形で護岸の屈曲が強く、

まるでリアス式海岸を連想させる。島の護岸は、河原石を用いて垂直にちかいように築き、その背後を砂利を利用して補強している。護岸の突出部には、石積に一定間隔で細長い割石を立て、護岸の高さも自然な高低を意識するなど、造景に自然な姿を演出しているようである。護岸の様相をみると、池の床面に残存する石積の最大高は60cm程度で、これが本来の高さであったとみられる。

島の東側には方形の突出部があり、池床面には根石が残っていることから、苑池の東岸に接している建物址（正面3間、側面1間）と連結する橋脚があったとみられる。橋脚と関連する石造物がまったく検出されていないことから、木橋であったと推定されている。橋脚施設周辺の池の床面には、50cmの厚さで瓦の堆積層が形成されており、木橋に瓦屋根を葺いていたと考えられる。池の東側にある建物址は、橋脚と連結するものとみられ、楼閣として推定されている。

南岸中央部には導水施設があるものと考えられ、ここが入水区として推定される。苑池外の南側から若干離れた地点で入水施設が一部確認された。南岸から20cm離れた位置から検出された入水施設は、東側へ向かい、苑池から5m離れた地点から西側へと折れながらのびるが、苑池の南岸中央部にいたり、入水区と連結するものと推定される。

苑池の西岸から3～5m離れ、幅5.2mほどの南北方向へいたる道路遺構が確認されているが、道路の方向と苑池の護岸が同じ曲率で連なっている。苑池と道路が同時に造成されたものと推定されており、他の苑池と大きな差異をみせている。

韓国の古代苑池は、平面形態によって方池系と曲池系に区分されるが、一番早い時期の高句麗苑池をとおしてみると、その平面形態は方形、円形、三角形、不整形などのように、方池系と曲池系が同時に5世紀代に存在していたことを知ることができる。もちろん、方池系の比率が際立って高いが、貯水が主たる機能であったと推定される安鶴宮の東南隅に位置する方池を除外すれば、安鶴宮の不整形曲池が一番規模が大きい。この苑池は4基の島⁵と宴会を催した建物の規模、築山などの共有空間から、安鶴宮内で最大規模の施設であったと推定される。百済の苑池は、発掘調査された資料がすべて方形であるが、現在まで宮苑池が調査されていないために、発掘調査された資料で推論するには多少無理がある。しかし、文献記録にあらわれる百済の苑池関連記事を詳細に検討すれば、辰斯王（4世紀末）、東城王（5世紀末）、武王（7世紀末）条に記載された「築山を造り草花を植えたり、禽獸を飼育したり、池内に島を造り舟を浮かべた。」という内容をとおしてみると、曲池系の苑池が存在していた可能性を推定することができる。また、最近発掘調査された益山王宮里庭園遺跡の水路は、たいへん発達した形態をみせているが、これは水路の機能とともに造景に対する比重が高かったものと推定することができる。また、導水施設と景石などで水路周

辺を華麗に装飾した形態とみれば、王宮里庭園遺跡は今後、百濟宮苑池が発見されることを期待させてくれる。

新羅苑池の場合には、7世紀中頃に編年される最も早い時期の遺跡として、九黃洞1次苑池があり、曲池の苑池とともに直線的な水路が調和の取れた形態をみせている。三国末から統一新羅初頭に編年されている国立慶州博物館敷地内苑池は、三日月形のやや独特な曲池の形状をしている。文武王十四年(674)に築造されたものと推定されるこの苑池では、方池と曲池の要素が同時に表現され、九黃洞2次苑池、龍江洞苑池が造成される8世紀代には、方池の要素は苑池形態のモチーフとして残っており、出入が複雑になる曲池の特徴をみせるようになる。

九黃洞2次苑池と龍江洞苑池は規模で多少の差異があるが、全体平面が隅丸方形である点と、南側の島の形態が方形に近い点、南側に入水区がある点などから共通点を見出すことができる。しかし、九黃洞2次苑池は水路と広場が組み合い、垣根と築台(堤)によって空間を狭く限定しており、閉塞的で静的な雰囲気を与えている。その反面、龍江洞苑池は隣接した道路遺構、橋脚と樓閣が設置された点から推測すると、開放的で動的な印象が強い点で大きな差異をみせている。外形的な様相では、共通で同じモチーフを持っていると推定されるが、苑池を利用する主体によって、細部的な差異がみえるものと判断される。最近、伝仁容寺址遺跡では8世紀後半に比定される方池が確認されたが、新羅地域で寺院の主要な出入口に方池が造営された初めての発掘事例である。これらの状況から、8世紀代の新羅地域では、多様な形態の苑池が多様な場所に造営されたことを示唆しているといえる。

以上のように、発掘事例が多くないために断言することはできないが、高句麗と百濟は方池の比率が高く、新羅は曲池の比率が高い。現在までに行われた調査内容をみると、方池と曲池の出現時期に対してそれぞれ差異を認めることは難しいが、二つの要素が同時に用いられている。また、曲池は外形が与える華麗な点から、宮・王室関連施設などのような重要な建物で主に採用されたものと推定され、方池は宮・山城などで貯水用目的として主に使用されたり、寺院内の池として採用されたとみられる。これは、日本においても方池の出現する遺跡が、宮よりも有力豪族の居宅または官衙などである点で類似性をうかがうことができる。

Ⅲ. 日本における主要苑池遺跡の検討

(1) 上之宮遺跡庭園遺構

上之宮遺跡は奈良盆地の東南部にあり、苑池遺構は緩やかな傾斜面に位置している。長方形の石組みと排水路、平面が弧状の石組溝に区分されている。石組は1.5×2.6m、高さ1.5mを測り、床面に石を敷き、北東側では幅50cmの排水区が石組の床石よりも約10cm高く

設けられ、北東側へ50cmほどいたる状況を確認した。おおよそ40～60cmの大きさの花崗岩を使用し、5段積み上げ、排水路は平均30cmの大きさの花崗岩を積み上げている。

石組を囲む弧状の石組溝は、直径が約6mの範囲で、幅約40cm、深さ30～40cmである。石組溝の北西面の一部は後代の建物址基壇によって一部遺失しており、北東側は調査範囲を越えているため、そのまま弧状にめぐるとか、排水路と連結するのかが確認できなかった。石組溝の積石は2段であるが、長辺側は横2段、弧の外側は縦1段で高く立て、その上を小ぶりの石で高さを合わせている。内側は長辺側と同一の横2段積みである。

長方形の石組と石組溝の間には、小ぶりの石を全面に敷いていたものと推定され、石組から石組溝へ緩やかに傾斜をもっていた。石組溝は長方形の石組から流れ込む水を排水する用途であったと推定される。

排水路は北側へ至った後、40m地点で東側へ向かっており、この付近から排水路と接して敷石が検出された。この場所から西面全面に三輪山を眺望することができるため、苑池が築かれたと想定できる。

入水路は確認されなかったが、懸樋などを利用して水を引き入れていたものと推定されている。このような形態の苑池では最古のもので、4～5世紀の水の祭祀と関連した城之越遺跡や南郷遺跡などとは差異をみせている。年代は7世紀前半に編年されており、『日本書紀』推古二十年(612)五月の条に、「百済国、路子工が来て宮の南庭に須彌山と呉橋を造った」という点と連動させ、推古朝の時期に渡来した多数の技術者たちによって造られた、新たな苑池と推定されている。

(2) 古宮遺跡(小墾田宮)⁶

玉石組池と呼ばれるこの苑池は、南北2.4m、東西2.8m、深さ0.5mを測る。平面形態は不整円形で、浅鉢状に掘形を設けた後、その内壁に15～30cm内外の川原石を積み上げている。石組が残存している地点は南壁と東壁のみであり、南壁はほぼ垂直に石を積み上げているが、東壁は約20°の傾斜で石の長軸側を積んでいる。図面からわかるように、東壁の最上段は南壁で使用される大きさの石を掘形の縁にそって置いているが、床面へいたる部分はそれよりも小さく、扁平な石を敷いている。池の西南隅には、排水路の役割をする小溝が連結しており、小溝の石積がそのまま池の南壁と連結している。

小溝は幅25cm、深さ20cmで、池の西南隅から南へ緩やかに蛇行してのび、大溝との交差点から西側へ直線的に流れていく。調査区域内からは約25mの範囲で確認された。小溝の側壁は河原石を1段立てて整え、部分的に小ぶりの石を積み上げて、上面の高さを合わせている。床面は、大溝との交差点以北では河原石で床面を備える反面、以南では床石を敷いていない。大溝を基点とした築造上の差異が生じた要因として、当初、大溝以北のみが造られたが、その後南側部分を増設し、継続して使用された点が挙げられる。

小溝の両側護岸に接して、幅10～20cmの河原石の上面を揃えて敷いた敷石が確認された。石が残存する部分は、南北1m、東西0.5mの範囲である。周辺には河原石が多数散在しており、本来はかなり広範囲に石を設けていたことがわかる。

池の北壁と西壁の石組は遺失して残っていないが、小溝と連結する西壁に南壁と同一の様相の河原石がひとつ残存しており、もともとは西壁は直線的な護岸で、垂直で直線的な形態を呈していたと考えられる。北壁は東壁の曲線的な護岸がめぐるのでないかと想定される。入水路は確認されていないが、懸樋などによって給水していたものと推定している。7世紀前半に編年される。

この苑池の形式もまた類例はないが、日本では稀な百済系蓮華文磚の出土などから、上之宮遺跡庭園遺構と同様、『日本書紀』推古天皇二十年（612）是歳条の記事をとおして、韓国との強い関連性を想定している。しかし、直接結びつけることは難しく、中国新疆ウイグル自治区キジル千仏洞第77・92・118窟の壁画にその類例を求めている。特に、第118窟（4世紀）の石窟天井壁画で描写されている不整円形の池は、S字状の溝が設けられている絵で注目される。

(3) 鳥庄遺跡庭園遺構

鳥庄遺跡は、飛鳥地域南東側に位置し、東側は多武峰の山塊から連なる尾根、南側は高取山から続く尾根、西側は雷丘、甘樫丘など、独立小丘陵に囲まれた狭い盆地にある。盆地の南端部、飛鳥川とその支流である冬野川が合流する付近が古代以来の‘鳥’と呼ばれている地域であり、蘇我馬子の居宅と嶋宮の推定地とされている。

2基の池が確認された。ひとつは方形池で、平面隅丸長方形を呈し、一辺42mを測り、最大残存深度は2mである。池の護岸は長さ50cmの河原石を垂直に積み上げ、池の床面は20～30cmの河原石を敷いている。中央へ向けて緩やかな傾斜が続いている。池は幅10cmの堤をめぐらせている。池と同一の平面隅丸方形である。その外面に石積がなされているが、30～40cm程の河原石を約70°の角度で3～4段積み上げている。本来は堤全体に石敷があったものと推定されている。

池北岸の中央部、堤下には排水用の木樋が設置されていた。床石の直上から出土した土器から、6世紀末から7世紀初頭に造られたものと推定された。奈良時代以後に埋没したが、平安時代から鎌倉時代には先の護岸の攪乱石群で護岸を築いた池が残存していた。

もうひとつの苑池は、方形池の北東側に位置しており、自然河川を模した水路と小池である。小池は地山を平面半円形に掘り、その中央に長さ2.3m、幅0.7m、深さ0.3mの石組を設けて砂を敷いた。懸樋から供給されたとみられる水は、石組から上がり半円形の竪穴内から西南方向へのびる溝に流れ込んでおり、この溝は直線状に北西方向へのびる。石組の中央から土馬2点が出土した。

小池の北側には、隣接して南東-北西方向の水路が確認された。幅5m、深さ1.2mであり、護岸に石積を設けている。北岸の石積は中央部が高く、上・下流部は高さを減じ、北西部には緩やかな傾斜をつけて石を敷いている。南岸の上流部の護岸には、1m程度の石を一列に配置している。水路の上流部は勾配が急で、下流部は緩やかになっている。上流部には不規則に石を敷いている。

水路の南東側へ少し離れた地点からは、石組暗渠が確認された。この暗渠は石舞台古墳の西側隅付近まで確認されており、石舞台古墳の南側にある飛鳥川支流の冬野川から水を引き入れていたものとみられる。暗渠は石組で、幅40cmから50cm、深さ40~50cmで、床面には河原石を敷き、天井石を横にして覆っている。暗渠の北側延長線上に水路が位置しており、本来は一体のものであったと考えられる。

小池、小池から離れた溝、水路の間の空間には掘立柱建物が位置しているが、小池と水路の流れを鑑賞した施設と推定される。

方形池が造られた時期は、7世紀第1四半期、方形池および小池と水路、建物が造られた時期は第2四半期に比定されている。

(4) 石神遺跡

石神遺跡は、飛鳥寺の北西側に位置し、日本書紀によれば服属儀礼の場所、または迎賓館としての機能をなしたものと推定される場所である。‘須彌山石’と‘石人像’と呼ばれる奇妙な石造物の出土地である石神遺跡は、1900年代初めに3回の発掘調査があり、石敷きなどの存在が知られた。さらに、1980年から1993年にかけての奈良国立文化財研究所による12次にわたる発掘調査では、7世紀中葉から藤原宮時代にいたる遺跡が複雑に重複して造営されたことが明らかになった。

石神遺跡第6次調査(1986年)では、長廊状建物によって囲まれた東側区画内から方形石組池⁷が発掘された。この石組池は区画の南側に位置し、先行する掘立柱建物を破壊して造られている。池の形状は一辺約6mの方形で、深さ80cm程度である。側壁には河原石を2~3段積み、四隅には石を立てている。側石の裏込め土は粘土と砂質土を版築のように交互に押し固め、池の床面には地山上面に粘土を敷き、その上に小ぶりの石を敷いている。

入水、排水施設は確認されていない。ただ、側壁と池床面の構築状況などから、水を貯めた施設である点は疑う余地はなく、懸樋などの入水施設が全部削平された可能性もある。また、池内部には長期間水が貯まっていたことを示す堆積層が確認された。この時期の遺構変遷が無秩序になされ、池の中心に多量の砂利が堆積していることを勘案すると、長期間にわたる貯水施設ではなく、一時的な用途で使用された施設とも考えられる。断定しがたいが、廃棄時、池の中心に大量の砂利が入っていることをみれば、一気に埋没した可能性が高い。石組池の年代は石神遺跡の最盛期である7世紀中葉に位置するとみられる。

もうひとつの方形石組池は、石神遺跡第3次調査（1983年）で発掘された。この石組池は、幅40～90cmの自然石を一律に立て側面を造り、床面には拳大の石を敷いている。幅は東西3m、南北3.2m、深さは約60cmである。池の床面は黄色粘土上に砂利を敷き、その上には灰褐色の粘土層が堆積していた。貯水施設と考えられるが、入水・排水施設は確認されていない。以上のように、石組池は石組・池床面の状況と入水・排水施設が確認されていない点など、前述した方形池と形態上類似している。その一方で、造営時期が7世紀後半である点と石神遺跡の外側に位置していたという点など、遺跡の性格上、多少の差異をみせている。

(5) 郡山遺跡

郡山遺跡は、宮城県のほぼ中央部に位置する仙台市太白区郡山に所在する官衙・寺院遺跡として、畿内を拠点とした王権が東北まで進出し、支配を強化したことを裏づける遺跡である。

遺跡は、飛鳥・奈良時代のⅠ期官衙、Ⅱ期官衙、Ⅱ期官衙付属寺院（郡山廃寺）、官人居宅、関連官衙などで、これ以外にも、縄文時代から江戸時代までの遺構が検出された複合遺跡である。石組池と石敷遺構を含むⅡ期官衙は、遺跡内中央の北側に偏在する。

石組池は、Ⅱ期官衙政庁正殿の北東側20m程度に位置している。拳大から人頭大の河原石を積み上げた方形池で、東西3.7m、南北3.5mを測る。ほぼ正方形で、深さは現存60cm程度であるが、同一時期の石敷遺構上面からの深さは80cm程度と推定される。四壁は枕状の横長の河原石を端面が外側に向くように、4～5段に積み上げている。池床面には拳大の若干扁平な円形の石を敷いているが、床面の浚渫をしながら、大部分は掘り上げられてしまったものとみられる。床面と側壁付近の堆積土は、粘土・シルトが主体をなす。池の北辺中央には、給水用石組溝が北から一直線上にのび、池と連結している。また、池の西辺中央では排水用の石組溝が池の南側にある石敷遺構の北側に並行して、直線的に西側へのびている。

同一時期にこの池と一体であったと想定される石敷遺構は、正殿の北側に接して、南北13m、東西11m以上の範囲に広がっている。石敷遺構以外で、この周囲に関連した建物痕跡などは発見されていない。池の北側には、給水用の石組溝と連なるものと推定される東西方向の長い石組溝が設けられているが、政庁地域の北側境界と考えられている。また、東方には政庁の東側境界と考えられる桁行7間の南北棟建物が、石組溝から27m離れて位置している。このように、正殿の北側には政庁関連施設はほとんどみられず、石敷遺構と石組方形池などにより構成された、非常に特異な空間が広がっている。年代は、7世紀末から8世紀初頭に比定される。

(6) 飛鳥京跡苑池遺構

苑池は、飛鳥京跡（飛鳥浄御原宮）内郭の北西、飛鳥川沿いに位置する。堤防によって区画された池と島、水路、石造物などが確認された。池と水路は部分的に発掘が行われたが、全貌を確認することはできなかった。池の全体的な平面形態は、直線と緩やかな曲線で構成される南北に長い不整形なものであったと推定される。池の全体規模は、南北100m、東西50mほどである。西岸は直線的に北西側へいたり、90°に折れ北東側へのびる。池の中心部には東西方向の堤防があり、池の西岸は堤防を越えて、北側へ直線的にいたる。直線的な西岸は北岸にいたると、緩やかな曲線を描く。南岸は、緩やかな曲線を描きつつ西岸へ連結している。堤防を境界として南池と北池に分かれる。

池の護岸は西岸と南岸一部が確認されており、50cm前後の河原石を積み上げている。残存高は最大で130cm、4段の石積が残っている。南池で確認された西岸は比較的垂直に積み上がり、北池の西岸は階段状を呈する。

堤防は、幅5m、長さは32mである。東岸との連結部分は調査されていない。水平に整地して造成されており、両側面には40cm前後の石を積んでいる。残存高は1.3mである。

南池にのみ2基の島があるが、中島は堤防から南側へ約18m離れて位置している。32×14mの範囲に北西-南東方向に細長く、不整形の平面形態を呈しているが、その軸は堤防と同一である。護岸は50cm前後の石を垂直に積み上げている。高さ1.2m、4段残存しており、島の上面からは特別な施設は確認されていない。

中島から南側へ約18m離れた地点に、島状積石と呼ばれる遺構がある。平面形態は東西に長い不整形楕円形であり、11×6mの範囲に、10~50cm大の石を60cmの高さで積み上げている。上面は平坦に整えている。

池の床面には敷石がみられる。西岸と南岸では護岸の最下部で5m幅の敷石が確認された。堤防の南側にも敷石がある。堤防の北側には、西岸から砂利で固めた床面が10m程の範囲で確認され、それ以外は平坦面として造成されている。北池は中央部から敷石が確認された。

堤防の南面東側縁には、30~40cmの大きさの石を一行積み上げた、2.9×1.4mの規模の段状敷石施設がある。堤防最下段には堤防と直交して、南池と北池の水を連結する木樋が2基確認されている。

また、入水部に使用されたものと考えられる流水施設の石造物が発見されている。2.7×2mの大形石槽と、水の流れを円滑にするように溝を彫ったの石造物、管をさし込んで水が噴き出ようにした石造物が、組み合わせられて入水区の流水施設として使用された。

東北隅では、南北方向へ長くのびる水路が確認された。排水路の役割をしたものと推定される。水路の幅は苑池と連結する部分が5.8mであり、北側へ向かいながら少しずつ広がり、北側へ折れる部分では約10m程まで確認された。部分的に多少の差異はあるが、石積護

岸であり70°～80°の傾斜をもっている。この苑池は斉明朝に完成し、天武朝に廃棄されたものと推定されている。

(7) 平城宮佐紀池庭園遺構

佐紀池は、奈良盆地の北端部にある平城宮跡第一次大極殿院の北西部に位置し、平城宮の西側付近に位置していたと想定される西池宮と関連した苑池と推定されている。現在の佐紀池は、東西160m、南北150mのL字形をしており、谷地形を利用した水田に南堤と西堤を造成した用水地として利用されている。

佐紀池の発掘調査で、奈良時代の池の西岸と東岸、北岸を確認し、護岸の状況が明らかになった。西岸はほぼ南北に直線的であるが、東岸は現在の池の形状に近い屈曲をみせる。護岸は傾斜約10°の緩やかな斜面で、人頭大の石を約2m程度敷いている。特に東岸は遺構の残存状態が良好で、敷石の東側には様々な大きさの自然石が配置されている。現在住宅地になっている西岸南部には、半島状に高い地点がみられるが、整地はなされておらず自然地形であると確認された。

入水路は池の北岸に位置したものと推測され、排水路は南岸で確認されている。これは平城宮の中心排水路に連結する。

池の造成時期は、初期堆積層から和銅六年(713)の紀年がある木簡が出土したために、平城宮造営当初と考えられている。さらに、敷石を破壊した腐植土層から天平十八年(746)の墨書土器が出土し、洲浜礫敷の造成が、奈良時代前半には確立していたことを物語っている。

佐紀池西岸南部の小台地西側には、佐紀池と同一の「池田」の小字名をもつ水田があり、ここまで苑池が拡張されていた可能性が高い。また、佐紀池造成以前の地籍図には、東西の里道が記載され、平城宮西面北門推定地で東側へのびる宮内道路に一致する。ここが苑池南堤の痕跡であると考えれば、苑池は谷地形を堰き止めたり、小台地を池の中心地から長く出るひとつの出島とするなど、自然地形を巧妙に使いながら、東西約220m、南北約150m程度の広大な規模を有していたと推測することができる。

加えて、奈良時代前半に洲浜礫敷と景石をともなった庭園意匠が存在したことを実証した点でも重要な遺構である。

(8) 平城京跡左京一条三坊十五・十六坪庭園遺構

平城京左京一条三坊十五・十六坪は、奈良山丘陵西部の南側へ広がる舌状支丘を利用して築造された佐紀盾列古墳群の東側末端付近、奈良山丘陵麓の緩やかな傾斜を有する扇状地に立地している。この地域は、奈良時代には平城京の北側末端にあたり、平城宮とも近く、東側の奈良山丘陵の一部を占める不退寺裏山、北側のウワナベ古墳を眺望することができる最高の高燥地であった。

奈良時代、平城宮東側の平城京北辺地域一体は佐保と呼ばれ、『万葉集』『懷風藻』など、当時の文献によって、高級貴族が在宅をなした地域であったことを推定することができる。

平城京跡左京一条三坊十五・十六坪は、ウワナベ古墳の南東側に位置し、平城京造営当時、東西側に前方後円墳2基（平塚1・2号墳）の墳丘を削平し、周濠を埋め立て平地を造成した。奈良時代の遺構は大きく3期に区分されるが、第1期の開始は平城遷都の和銅三年（710）頃、第2期は養老・神亀年間（717～729）頃、第3期は奈良時代末から平安時代初頭にあたる。第2期から第3期の間には大きな空白期間がある点が特徴である。十五・十六坪は、奈良時代にひとつの敷地として利用され、奈良時代初期に該当する第1期と2期には、敷地北側に建物群、南側に苑池を配置する居宅であった。

苑池は、この敷地内にあった平塚2号墳の前方部周濠西南隅を利用したもので、東岸は前方部に沿って長く突出する形態の洲浜を造成している。洲浜の斜面勾配は3°程度で、古墳斜面の勾配の約28°に比べ、緩やかな形態を呈する。この洲浜を背にするように、6個の石（約50～90cm）を敷石として配置している。これらの敷石は、東南から西北方向約6mの間隔で3個ずつ2条に施されている。東南側のものは両側に大形の石を配置し、中央にやや小形の石を置いており、石の節理によって波状の褶曲をみせるように考案して配置されている。また、西北のものも若干原位置から動いていたが、やはり中央に小形の石を置き、両側に大形の石を配置している。これらの景石は、石の底面が埋められている1個をのぞいて、すべて地山面上から検出された。池の東北岸以外の苑池遺構は明確ではないが、東西18m、南北10m前後の規模の池が想定されている。池床面は、粘土質の地山を直接利用し、砂利などを敷いた痕跡はない。水深は20～25cm程と推定することができる。また、敷石に用いられた石の材質として、3個は黒雲母石英質片麻岩、石英質片麻岩であり、これらは奈良市東部の高円山周辺から産出したものと推定される。また、古墳の葺石の大部分はチャートで、両輝岩、安山岩、片麻岩、花崗岩、石英斑岩などが混在しているが、これらは奈良坂付近の洪積層のものとみられる。

苑池としての給水は、北からの導水路による。この導水路は苑池北方にある中心建物の北東から、東西方向へのび、ほぼ直角に折れて南へいたる。幅1.2m程度の小形の溝であり、中心建物の東側を2筋に分けながらのび、中洲状の島をなしている。この2筋が再び合流する地点よりも南側は古墳前方部西面に沿って流れ、苑池に到達するようである。

この苑池は、神亀六年（天平元年、729）に謀反の嫌疑で自決した長屋王の居宅であった場所と推定されている⁸。

(9) 平城宮跡東院庭園

平城宮東院庭園は、平城宮東側の東南隅にある。南と東に築地塀を具え、北と東を板塀で囲った区画の範囲は東西約70m、南北約100mである。遺跡はその区画の若干南側に位置

して、東西は最大約50～60m、南北約60mの逆L字形に近い形態を呈する。

東院庭園は3時期に区分され、最下層苑池（710～720年頃）、下層苑池（720～767年頃）、上層苑池（767～784年頃）に分かれる。池の規模と位置は当初から大きな変動はなく連綿と営まれてきたとみられ、最下層苑池の段階から東院苑池の基本プランは確立されたものとみなければならないだろう。

最下層苑池は、南半部および東側と北岸の一部で確認された。池の平面形態は、単純な逆L字形をみせている。規模は、南北66m、東西北半分は20～25m、南半部45m、深さ0.5～0.8mである。護岸は屈曲がなく、緩やかな直線的な形態を呈しており、隅丸である。護岸石は上層苑池によって大部分が失われているが、部分的に残存するものをみると、大きさ30cm前後の石を2～3段ほぼ垂直に積んだ石積部分と、同一の大きさの石を20°前後の傾斜で斜めに貼った部分とがある。池床面に敷石は確認されておらず、景石も確認されていない。入水部は池の東北隅に推定することができ、幅1.1～1.5m、深さ40cmである。池の水深は、全体的に20～30cm程度で浅く、排水区がある東南部は深さが60～80cmであったものと推定されている。

下層苑池は、最下層苑池を埋め立てて造られているが、最下層苑池と大きな差異はなく、平面形態は逆L字形を呈している。しかし、護岸に屈曲が加味され、やや曲線的で自然な効果を与えている。しかし護岸が緩やかにのびる形態のため、単調な印象をもっている。護岸は長さ30～50cmの石を汀線に沿って一石ずつ直立させ、その上に10～20cmの石を斜めに敷いた洲浜と、石を直立させず、斜面に敷いた洲浜部分が混在している。洲浜斜面の勾配は約7°程度である。池床面は護岸に連なり、北半部東・西岸は1～2mの帯状の範囲で、また、北西部の護岸のように広く屈曲する部分は4～6m程度の幅で、30～50cmの扁平な安山岩の石を敷いている。しかし、南半部は少し異なる。池の西南部には帯状の敷石はなく、護岸の外へ突出した部分の内側にのみ石を敷いている。苑池の南岸西部、苑池へ長く突出する建物の前面には、幅3m、東西長20m以上の帯状の範囲に敷石を施した可能性が高い。池の深さは北側が5～10cm、南側は35～50cmで浅いほうである。景石は1個確認されているが、同時期のほかの苑池遺跡と比較してみれば、景石はもっとあったと考えられるが遺失したものと推定される。

入水部は北東隅に位置し、石組溝で床石が一部残っているが側石は遺失している。床面は20～40cmの扁平な石を敷き、幅は50cm、高さは20～30cmに推定されている。

排水路は、池の東南隅と西南隅の2箇所位置する。池から8～9m南へのび、南面築地の雨落溝に合流する。床面には30cm前後の石を2～3列敷き、溝の幅は約60cm、側石は遺失しているが、深さは20～30cmに推定される。

下層苑池では、2基の蛇行水路が確認されている。ひとつは南岸の西側辺に位置し、南西

隅にある排水路から2.5m離れた地点から、曲流して東側へ37m程度のび、南面築地の雨落溝に合流する。側石は遺失して床面の石のみ残存している。床面は大きさ30～50cmの石を用い、両側面はやや高く、中央は若干低く2～3列敷いている。上流部に側石がごく一部残っているが、大きさ10～15cmの石を床面よりも5cm高く立てている。残念なことは、苑池との連結部分に石が残っておらず、苑池との連結がどのような形態であったのか、その役割が何であったのかに対しては明確ではないが、水量調節のための施設であったものと推定されている。この蛇行水路は、排水路よりも高い地点で苑池と連結しているものと推定され、水路の形態としてみれば、水量調節の役割のみでなく、苑池とともに造景の役割もなしていたことは間違いない。

もうひとつの蛇行水路は、苑池の西北側から東側へ曲流して、19m程長くのびているが、その様相は南側と同一である。水路の幅は70～80cmであり、上面が扁平な20～40cmの石を2～4列敷いている。南側と同様で両側面が高く、中央部が低い。高低差は9cm程である。北側の蛇行水路の際立った特徴は、浄水施設と推定される遺構2基が、水路の北端に位置していることである。すなわち、北側から流入してくる水は水路北端の浄水施設をとおり、蛇行水路へと流入し、これが苑池へ流入したものとみられる。水路の北端と連結する浄水施設は、東西1.5m、南北3mの範囲に、5～15cmの石を床面に敷いている。その北側に連なってもうひとつ浄水施設があるが、南側の浄水施設よりも大きな石が集中的に敷かれている部分があることから、残存状態が良好ではないが、水路形態としてみるのは難しく、小池として推定することもできるかもしれない。

上層苑池は、下層苑池の護岸と水路などに用いた石の大部分を破壊して造成された。池の規模には大きな変化はなく、池の東北部分が東側へ13×10m程度確認されている。しかし、池の規模には大きな変化はない。比較的単調な水路であった護岸は、屈曲に富む複雑な様相へと変化し、池の北東側の拡張部を除いては、池床面、護岸の傾斜面、護岸外側まで全面にわたって数cm大の石を敷いている。護岸は典型的な洲浜の手法をなしており、池の深さは30～40cm程である。

また、池の南西部には、東西約10m、南北約8mを測り北側の中央部分が若干くびれた中島を造り、築山を造成し、護岸と池内部に景石を置いている。東北拡張部の池床面には、水生植物を植えたものと推定される円筒形の本製品（曲物）が発見された。

上層苑池の入水部は、東北隅と池の南半部北岸の2箇所にある。東北拡張部の北側には、東西3m、南北6mの小形池が連結され、小形池の西側辺には西から東側へ直線的に流れる入水路が連結されている。小形池は、入水部の施設とみることができ、護岸と池床面には50cm前後の石を置き、池と連結する部分に石を一段積み上げ、水が流れ落ちるようにしている。このような機能は、また入水路から流れ込む水を一回堰き止める役割をしている。

池の西側辺に連結する入水路は、幅40cm、長さ20～30cmで、床面に石を敷き、側面に石を一段設けている。

南半部北岸にある入水路は、石を詰めた暗渠であり、若干西側へ傾斜し、北から南側へ直線的に繋がる。幅60cm、長さ25cmの土坑に5～10cmの石を詰めている。

排水路は池の東南隅にあり、木樋暗渠を設置した溝のみが残存している。しかし、この排水路は他の宮苑池の排水構造と比較すると、平常時に水を流し送ったものとみるよりは、池全体の水を排水する際に使用したものと推測され、木樋の上に排水施設が別途にあったものと考えられる。

東院苑池に築かれた建物を詳細にみると、最下層苑池段階に建物は確認されず、下層苑池段階には、池西岸の屈曲部北側と南岸に2棟の建物が設置されている。2棟ともに蛇行水路と護岸の間に位置しており、池の護岸に接している。この配置は、池と蛇行する水路すべてを造景する配置ということができよう。上層苑池段階では、池西岸の屈曲部北側の建物が池の方へ少し長く突出しており、規模も少し大きい。建物は橋脚（平橋）から連なり池の東岸と連結する。池の北東側の拡張部にも橋脚（反橋）が設置され、池の北側入水路外側に建物2棟と、敷地南東隅に逆L字形の重層と考えられる建物が位置している。

東院苑池で、幅11cm、長さ56cmのミニチュアの木舟が出土したが、池に浮かべていたものであろう。

東院苑池は、飛鳥時代の主流であった方形の石積護岸から、奈良時代の主流である曲池と洲浜護岸へ変化する状況を見せる重要な庭園遺跡の中のひとつである。よって、韓国の庭園遺跡と多くの点で比較される遺跡である。

(10) 平城京跡左京三条二坊六坪宮跡庭園

遺跡は、奈良盆地北端部の平坦地に位置する。南へ若干傾斜する地形にあり、敷地の東側には佐保川の支流、菰川が南に流れる。平城宮東南隅から東南へ約300m離れた地点に位置している。この坪は、約124m四方の正方形を呈する。北側の左京三条二坊一・二・七・八坪は、奈良時代初期に長屋王の居宅などがおかれ、この一帯には上流貴族の居宅が造営されていた。

六坪の発掘調査は7回にわたって行われた。総発掘面積は約6,200㎡であり、これは六坪の約40%にあたる。六坪の中心部と北半部が主に発掘され、奈良時代前期、中期、後期の3時期に区分される遺構が確認された。

苑池が造られる以前の奈良時代前期には、六坪中央部に菰川の旧水路を踏襲した浅い流路が流れていた。この流路の堆積土から出土した木筒の中に、「北宮」と記録されたものが2点ある。北宮は長屋王室の吉備内親王邸を指し、条間路を間に置き、北側に隣接した長屋王邸宅から流れ出たものと推定されている。六坪でも敷地内の水はこの流路に集まり、南

側へ排水されている。流路の西側にある六坪西北部には、「コ」字形に建物が配置されており、役所または居宅と推定されているが、敷地内に庭園は整備されていない。時期は遺構内から出土した土器から、和銅初年（708）～天平末年（749）に比定することができる。

奈良時代中期になると、敷地中央の蛇行する流路を埋め立てて整備した後、従来の流路に沿って粘土の上に石を敷いた苑池を築造した。苑池は六坪を東西南北にそれぞれ3等分、すなわち9個の区画に等分したときの中央に位置する。この中央の東辺と北辺は板塀を囲み、苑池の西側には板塀に東側柱列を揃えた建物が建てられた。この建物から苑池を眺望していたと推定している。

苑池は、幅2～7m、延長55mで緩やかに屈曲してのび、水深は上流部で20cm、下流部は30cmと浅い。苑池床面は、直径20～50cmの扁平な石を敷いている。床石は上流部では平坦に、中流部では凹状に、下流部6mは木樋排水路に向かって一段低く石を敷くことで、自然に水が流れるように考慮されている。汀線には床石に接して20～30cmの玉石を配置し、この石列の外側にも苑池床面の様相と同じで、緩やかな勾配で扁平な石を敷いている。その幅は、広いところで2m、狭い地点では30cm程度である。さらにその外側には1～3mの幅で拳大の大きさの石を敷いた。汀線に沿って5箇所、洲浜外縁に沿って4箇所に石組があり、池の中央には石をひとつずつ3箇所に置き、岩島を構成している。石組は海岸、または溪流の景観を考えた自然風景を模写したもので、後代の日本庭園の基本形が大部分ここにみられる。池床面、および護岸に使用された玉石は三笠安山岩で、石組に使用された景石は大部分が片麻岩、花崗岩で、三笠安山岩、石英斑岩、チャートも混ざっている。また、池床面には木枠で造った「鍵手」形の柵が2箇所検出された。水生植物用の栽培用柵であったと考えられる。

池への給水は、池北端に埋設された木樋暗渠をとおして行われていたが、その水源は暗渠の北西側に設置された井戸である。井戸から木樋への給水は、木樋末端部に設置した縦樋を利用したと確認された。木樋をとおして供給された水は、池北側に造られた池水浄水用の小池に一度貯められた後に、小池の護岸を溢れ出して池全体に流れ込ませる構造をしている。池床面に敷かれた石、床面が透けてみえるほどの浅い水深、清浄な池の水を確保するための考案など、奈良時代の苑池の意匠と技術をみせている。

排水は2種類の形態でなされている。平常時には池末端の護岸を越えて流れ、南側の排水用大溝へ流れ、これと別に、池全体の水を排水するための木樋暗渠が、池末端部分の床面に埋設されている。

以上の建物と苑池の配置を維持していた時期は、天平末年（749）～天平宝字年間（757～765）に比定される。

奈良時代後期に入ると、苑池の東、北面の塀には変化がないが、西側に塀と建物が建て

られ、塀北側の建物群も大きく変化する。池の西側には主屋に該当する大規模な南北棟礎石建物、西岸近隣には南北棟掘立柱建物が建てられた。北塀の外側には2棟の東西棟建物が配置される。苑池は改修の痕跡はなく、中期の状態のままであるが、奈良時代末から平安時代初期には周囲の塀も消失し、庭園は廃棄された。

日本では、水と関連した祭祀意識をもつ遺跡が早い段階から出現している。しかし、本格的な庭園遺跡といえるものは、飛鳥時代からであろう。飛鳥時代の苑池の特徴は、直線的な平面形態に、ほぼ垂直に積み上がる積石護岸を持つ方形池である。上之宮遺跡（6世紀末～7世紀前期）、鳥庄遺跡（7世紀前半）、石神遺跡（7世紀中葉）、郡山遺跡（7世紀末～8世紀初）などで確認されており、これらは方池デザイン、直線護岸、付帯施設である石敷広場と石造物などとともに、韓国に起源を求めることができる。しかし、7世紀前半の古宮遺跡では、曲線の長い水路と直線と曲線が調和をなした小形苑池が確認されている。上之宮遺跡は、方池と曲線の水路が調和をなした状況をみせている。一方、『万葉集』⁹からは、飛鳥時代の終末期（7世紀末）に曲線的な汀線を持ち、自然風景式の各種意匠を備えた庭園形式が共存したものと推定される。

奈良時代になると、方池は消滅し曲池一色へと変わり、石積の護岸は日本庭園の特色である海浜風景を模写した洲浜護岸へと移行する。代表的な遺跡は佐紀池、古墳周濠を利用した平城京跡左京一条三坊十五・十六坪庭園遺構、平城京跡左京三条二坊六坪宮跡庭園、東院庭園などがある。しかし、この中でも特に東院庭園は、方池から曲池への変化をみせる代表的な遺跡である。8世紀初頭の最下層苑池は比較的直線的な護岸を有し、池床面の石敷き、積石の護岸技法などから、飛鳥時代の方池の特徴が強くあらわれている。下層（8世紀中葉）苑池は、平面形態で方池的な要素が依然残っているが、曲池の要素がより強くあらわれている。それとともに、曲流する蛇行水路は苑池に劣らず、造景で重要な役割をしており、州浜護岸も部分的にあらわれる。上層（8世紀後半）へいたると、護岸の屈曲が複雑化した曲池的な要素が強くなる。日本でも、飛鳥時代の苑池で方池的な要素が強くなるが、曲池と長い水路が組み合わさった形式がみられ、方池的な要素が残っている苑池が、長い水路とセットになる形式は、東院下層苑池まで継続するものとみられる。

IV. 九黄洞苑池の性格

九黄洞苑池の概要 九黄洞苑池は、皇龍寺址展示館建設による発掘調査で確認され、1999年から2004年まで国立慶州文化財研究所で調査を行った。遺跡は、皇龍寺址の北側、芬皇寺址の東側に位置し、慶州四獄¹⁰が交差する地点にあり、普門池から西南側へ流れ落ちる北川が西北側へ曲流する地点の南岸に該当する。苑池遺構は、皇龍寺址展示館敷地内の

南東側に位置する。苑池および苑池と関連した「己」字形水路、小形水路、六角形遺構などが確認された。

苑池 苑池を含む庭園敷地は、東、西、北側はタムジャン(垣)、南側は堤で区画されており、苑池が位置する東側が広く、水路を配する西側へいたるほど狭くなる。

苑池は北川の氾濫で形成された河床堆積層を境界として、1次と2次苑池に分けられる。

1次苑池は、2次苑池の調査時に部分的に護岸が確認された。南岸、東岸の南辺、西岸、大島の西南辺、西岸突出部で部分的に確認されているが、全体的な平面形態を推論することは難しい。確認された護岸に限ってみれば、苑池の南半部と突出部が、2次苑池と類似した形状を呈していたと推定できるが、苑池の北半部も2次苑池と同様の形状であったかどうかは疑問である。これは、大島と北岸のトレンチ調査で、1次苑池の護岸がまったく確認されなかったためである。2次苑池として確認した大島と小島が、1次苑池と併存していたのかは確認できなかった。1次苑池の護岸は自然石で積み上げた石積護岸で、長手積によって石を積み上げている。2～3段が残存しており、高さは55cm前後である。池の床面には特別な施設はなく、石と粘土を押し固めた層がみられる。

1次苑池の入水部は不明で、2次苑池として確認された西岸突出部において、1次苑池の護岸である長手積手法の石積最下段が一部確認されており、1次苑池の時期にも西岸が何らかの形で突出していたことは推定することができる。また、後述するように、1次苑池と同時に造成された「己」字形水路が連結している点からも、これを排水路の一部と推定することができる。

2次苑池は、北川の氾濫によって、堤より下のすべての遺構が埋没した河床堆積層の上に造成された。比較的単調な構造であった1次苑池の護岸にくらべ、ほぼ垂直に積み上がる護岸石積は、一部に以前の時期の長手積の護岸を維持する部分もあるが、湾曲に富み河原石と割石を乱積する方式に移行する。残存する乱積された石積みの最大高は130cmである。

入水部は南岸に位置している。庭園敷地東側タムジャンの南側の下部からのびる幅40cm、高さ49cm前後を測る入水路は、その幅が少しずつ広くなりながら西側へのび、2.2×5mの大きさの方形の石槽と連結し、方形の石槽から再度入水部へと連結する幅1.1m、深さ70cm前後の入水路がつながる。方形の石槽から苑池の南岸へと連結する入水路の境界には、石を立てているが、方形石槽は水を一度堰き止める役割をしたものと推定することができる。南岸の入水部は、石を詰めた閉塞施設を有しているが、最後に護岸が使用された際、入水施設を廃棄したものと考えられる。

排水溝は、西岸の突出部に推定している。幅5～6m、最大高80cmの乱積した側壁を持ち、1次苑池の突出部とほぼ同一の位置にあり、側壁の突出が強調されている。南側へ折れる突出部は、2次苑池の堤と1m程離れた位置までのびて収束している。後述する小形水路を用

いて排水が行われ、西岸突出部の南端と、8m西側にある貯水池（集水井）の間には周辺よりも大きな石を用いた暗渠が地下で連結しており、暗渠をとって貯水池にたまった水が、小形水路により排水されたものと推定されている。

苑池の内部には、大島と小島が北と南に位置している。南側の小島は隅丸方形の平面形態を呈する不整形の護岸を有しており、大きさは10×11.5mである。小島は整地することによって造られた人工島で、内部は黄褐色粘質土と褐色砂質土を交互に積み、外部は石、砂、粘土を被覆して整えた。上部平坦面には、河原石（30～40cm）が3×4mの楕円形に残っており、上部に構造物があったことを推定させる。大島は菱形に近い楕円形で、全周が70m、面積は301㎡である。上部には広い平坦面があり、建物などの施設の痕跡は発見されなかった。大島は小島とは異なり、整地ではなくもとの地盤をそのまま用いて、周辺を球状に掘削して造成された。小島周辺の苑池床面よりも、大島周辺の床面が高いことをみると、大島は小島のように恒常的に島であったとみるよりは、水が少ないときは小島ひとつだけが島としてあり、水が多いときは大島周辺まで水がいたり島が2個あるようにみえる、という意図的な造景の一手法であったか、あるいは水位調節の目的で造成した水路によって、大島のようにみえるようになったのかは明確ではない。

苑池の床面は上・下層に区分されるが、下層床面は砂利の層、または石が混入した粘砂質土層、上層床面は密度が低い砂と砂利の層である。下層床面は常に浸水していた小島周辺、すなわち苑池の南半部に造成され、上層床面は大島周辺、すなわち苑池の北半部と突出部に造成されていた。苑池の南半部と北半部でみられる苑池床面の差異は、前述したような大島、および苑池北半部の役割についての根拠となるであろう。

「己」字形水路 「己」字形水路は、苑池の西北側から確認され、北西－南東側へ一辺17～19mの長さで「己」字状に延びている。確認された総連結長は98mにおよぶ。水路の幅は1.2m、壁石は河原石1段で、床面は小ぶりの砂利を敷いている。水路周辺は、川砂利を敷いた敷石施設が全面にわたって確認されている。敷石施設は水路を含めて幅約26mで、北西－南東側へ長くのびている。水路は西側へ延びながら一定の勾配で低くなっていき、南東側から北西側へ水が流れたものと推定される。この水路の両端部は上層遺構によって壊されており、水路の進行方向を確認することができなかった。ただ、1次築台（堤）と同じ方向へのび、敷石が築台の下段と連結していることから、1次苑池や1次築台と同時に造成されたものと推定される。苑池の排水路と推定される西岸突出部との直接的な連結を確認することはできないが、1次苑池の排水路と連結し、出水路の役割をしたものと推定される。「己字形水路」の壁石が低く、敷石施設がある点などから推測して、1次苑池と組み合わせられた庭園施設であることは間違いないとみられる。

1次築台と六角形遺構 1次築台は、苑池遺跡発掘調査当時、芬皇寺址の東側、タムジャ

ンまで北西－南東方向へ連なっていた¹¹。1次築台は「己」字形水路の敷石施設が築台の下段と連結しており、1次苑池を破壊して河床堆積層が1次築台の全面に溜まったことから、1次苑池と同時共存したものと想定している。1次築台の苑池南側付近には方形の突出部があり、築台と方形突出部の間に階段が設置されている。これは、築台の上と下とが有機的に連結していることを表している。六角形遺構は、方形の突出部より南側に位置している。平面六角形の土坑を掘り、30～40cmの河原石で六面を総じて長手積で構築している。床面には15～30cmの大きさの河原石を敷き、最大残存高は40cm、壁石は最大4段まで残っている。六隅からは柱穴が確認されており、上部に屋根のような構造物があったことを知ることができる。六角壁面の長さは340～410cmである。六角形遺構の東側の床面には、床面と同一の高さで暗渠が設置されており、この暗渠は方形突出部築台の東側面へと連結している。築台外へ連結する部分は確認されなかった。

小形水路と貯水池（集水井） 小形水路は、2次築台または1次築台と同様の方向へのびる。芬皇寺東側のタムジャンまで連なっており、本来は芬皇寺北側寺域地域まで連結していたものと推定される。2次築台は、芬皇寺東側のタムジャンから長く東南側へのび、苑池遺構の範囲にいたる。さらに、「ㄣ」状に屈折しながら苑池の突出部にいたり、1次築台の方形突出部部分で、方形突出部を形成し、苑池南側を囲みながら入水路周辺までのびる。排水路と推定される2次苑池の突出部が収束する部分から、西側へ8m程離れた地点に貯水池があり、そこからのびる小形水路は2次築台と対応しながら屈折し、芬皇寺の北側寺域まで連なっている。貯水池は方形で、河原石と割石を利用して造られ、長さ約1m、残存高は約1mである。貯水池の北壁からのびる小形水路は幅50cmで、深さ20cm前後を測る。貯水池は前述したように、西岸突出部と地下暗渠をとおして連結しており、西岸突出部の南端から大型の石を用いた暗渠を透過した水は、一旦貯水池に集まり、再度小形水路をとおり排水されていった。この地点の暗渠施設は、苑池の水を浄化する役割も担っていたと推定される。また、小形水路は排水の機能だけでなく、造景の役割もなしていたと推定される。小形水路の北側は、1次苑池の時期には「己」字形水路が造成された地点で、河床堆積層によって埋没して以後は、小形水路以外では建物などの施設がない空間であった。広場のような役割をしていた場所と推定される。

以上、苑池および苑池関連遺構群に対する内容を整理すれば、九黄洞苑池遺跡は大きく2時期に区分される。1次苑池、「己」字形水路、1次築台、六角形遺構が共存していた1次時期と、2次苑池、2次築台、貯水池と小形水路が共存した2次時期に分かれる。1次時期は、六角形遺構の床面から出土した古式の軒丸瓦と苑池内部の出土遺物をとおして、7世紀中頃に編年され、2次時期は護岸石積の間から出土した遺物から、8世紀前半に編年される。

1次の苑池は護岸の残存状況が良好ではなく、その形態を明確に知ることはできないが、

屈曲が緩やかで単調な護岸と、長手積手法を用いた壁石などを特徴としてあげることができよう。また、排水路の役割をしたものと推定される「己」字形水路は他の遺跡ではみられない重要な特徴である。「己」字形水路は、単純な水位調節のための排水の役割だけではなく、敷石施設を備える苑池の西北側にかなり広い範囲を占めながらのびており、苑池と遜色ない造景的な、あるいはまた別の役割をしていたものと推定される。

しかし、2次になると、苑池は護岸に複雑な曲池的要素が多く加味され、1次の「己」字形水路は幅が狭くなりながら築台に隣接していたり、水路を含めた敷石施設の空間が広場のように変化した。

そうだとすれば、九黄洞苑池はどのような性格の苑池だったのであろうか、誰のための苑池であったのだろうか？

九黄洞苑池の二つの特徴に対して、注目する必要がある。ひとつは、苑池西北側に位置する広場のような施設である。1次時期の「己」字形水路と敷石施設がそれであり、2次時期の水路と広い広場がそれに該当する。この場所では建物址がまったく確認されていない。他の庭園遺跡の状況をみれば、平素は宮の庭園遺跡として分離されながら、宴会、または遊興の空間として利用し、水路を兼備する広場施設があるものは全くない。よって、九黄洞苑池は宴会、または遊興の空間としてみるよりは、修行、儀式などを催していた可能性が高いものと把握される。

第二に、六角形遺構の性格が何であるかということである。壁石をめぐらし、床面に石を敷いた状態であり、これらが苑池のまた別の類型として解釈することもできるが¹²、六角形遺構は床石の下に干泥層を形成していなかった点と、排水の役割をした暗渠施設が床面と同一の高さで設けられていた点から、水が溜まっていたとみるのは難しい。しかし、壁石の存在と床面に石を敷いたことは、水と関連した一定の行為をおこない、水を流し送った場所としてみなければならない。それとともに、六角形遺構の位置も考慮する必要がある。1次苑池と共存した六角形遺構は、築台上に位置しており、排水の役割をした暗渠は、苑池の方向を向いている。築台外側へ連結する部分は確認されていないが、六角形遺構から流れ出す水は、苑池へ流れ込む以外ない。そうだとすれば、苑池よりも高い位置から、一般的な生活行為と関連した水を苑池へ流したりはしなかったであろう。苑池よりも高い位置から苑池へ流れ込んだとしても、問題のない水でなければならなかったはずである。具体的に、どのようなものであったのか？九黄洞苑池から確認される六角形遺構は、韓国国内からは資料がない。日本の場合、六角形遺構が確認された例がいくつかある。奈良加守廃寺の長六角堂、平城宮造酒司の遺構¹³、三ツ寺Ⅰ遺跡¹⁴の石敷遺構などがある。加守廃寺の長六角堂は長六角形の基壇が確認され、苑池の六角形遺構と比較するのは難しく、平城宮造酒司の場合は、内部に円筒形木造井戸があり、床面に排水路を造ったもので差異が

あるが、床面に石を敷き、六角形の隅に柱穴を備えており、本来は何らかの構造物であったという点で外形的な形態は一番似ている。しかし、井戸であるため九黄洞六角形遺構とはその性格と役割で大きな差異をみせている。三ツ寺Ⅰ遺跡の石敷遺構は、平面形態が六角形を呈し、床面のみ確認された状態である。壁石があるのか、単純な敷石なのかは知ることができない。上部には構造物がなかった。この石敷遺構は、水の導水と関連した祭儀をしたものとして解釈されている。

九黄洞苑池の六角形遺構もまた、水と関連した儀式が行われた場所と推定され、その具体的な行為を推測するにあたっては、隣接した芬皇寺との関連性を考えたいと思う。六角形遺構からは、外区外縁が高い形態で、連珠文がなく、子房が突出して花卉が写實的に模写された複弁蓮華文軒丸瓦と、百済系様式を呈する八葉単弁蓮華文軒丸瓦が共伴した。同一の軒丸瓦が芬皇寺遺跡で一定量分布している反面、慶州のほかの遺跡の出土例はきわめて稀であること、芬皇寺の発掘調査をとおして、九黄洞苑池側から確認された築台が芬皇寺まで連なっており、苑池内から続く歩道と小形水路も芬皇寺境内までのびていることなどから、この二つの遺跡は同時に築造されたものとみななければならない。以上の点から、九黄洞苑池と芬皇寺、この二つの遺跡は密接な関連があるといえよう。

よって、九黄洞苑池の六角形遺構は、仏教儀式の中で水と関連した儀式である灌頂式などを行った場所として推定してみることができないだろうか。

このような二点の特徴をとおして、九黄洞苑池は共用の空間ではなく、修行と儀式を行った寺苑池でないかと推測した。また、九黄洞苑池出土遺物において、金銅板菩薩坐像と青銅神将像は、上述の推定を裏づけている。通常の寺院と関連した苑池は、入口に位置する方池というように、その立地や形態に制限された傾向があるが、芬皇寺は新羅真徳女王三年(634)に創建し、景德王代にいたる7～8世紀には、慈蔵、元暁をはじめとした当時の高僧たちが主席する王室寺刹として、最高の全盛期を享受した寺院であった。そのため、他の寺院苑池とは異なった庭園遺跡の造成が比較的容易であったことは想像に難くない。過去、皇龍寺址の西辺で曲池と苑池が確認されたことがあり、時期は多少遅いが、仏国寺境内では九品蓮池として曲池の確認された例がある。

V. 考 察

以上から、九黄洞苑池は曲線の苑池と直線の排水路が調和をなす独特な形態をもち、造景と儀式的場所としての二つの役割を満たした寺苑池と推定することができる。特に、1次苑池は新羅地域で最も初期の形式で、敷石を水路周辺にともなう点からは、日本の上之宮庭園遺跡と古宮遺跡との類似性をみることができ。また、曲池の水路は平城宮東院庭園下層苑池のように、水路の造景的な意味が多く強調される点などから、相通ずる面もなく

はない。加えて、百濟武王代に造成された王宮里庭園遺構は、水路形苑池として、池の機能よりも水路の一部に華麗な意匠が加味されたものと解釈しなければならないだろう。そうだとすれば、形態上で多少の差異をみせるが、7世紀前半に水路の造景的な意味が強調された苑池の様式が、百濟と日本で出現し、新羅地域は7世紀中頃からみられることが分かる。この様式は、8世紀前半の九黃洞2次苑池においても継続してみられるが、水路が苑池の区画内において、中心部から周縁へ移動し幅が狭くなる点から、多少退化したような状況を見せている。このように、水路が強調される苑池の形態の起源に対しては、日本古宮遺跡の説明で言及した中国キジル千仏洞第118窟、券頂北側壁菱形格壁画の池の形状に見出すことができる。4世紀代のこの石窟の天井には、釈迦、菩薩の周辺に山、木、鳥などとともに曲池と方池が描かれているが、屈曲した水路が強調される描写から、類例の可能性を想定しておくこととしたい。

加えて、1次苑池で共存する六角形遺構は韓国でその類例がなく、仏教の灌頂式などの儀式を行ったものと推定される。具体的な儀式には差異があるが、水の導水と関連した祭祀儀式を行った、日本三ツ寺I遺跡の石敷遺構との類似性を想定してみたい。六角形遺構がこのような祭祀儀式、または神聖な儀礼行為を行った場所に採用された背景は、今後考えなければならない重要な課題である。

註

- 1 정재훈 『韓國傳統의 苑』 도서출판 조경사, 1992.
- 2 오승연 「韓國 古代 宮苑池에 관한 研究」 동아대학교대학원 석사학위논문, 2002.
- 3 慶州博物館敷地内苑池に対する記録は、博物館新聞と박방룡の論文から確認することができる。博物館新聞では、石築であるかについての言及はなく、苑池内の堤が2基であったと報告されている。これらを若干詳細に説明した박방룡の論文では護岸石築に言及しており、苑池内の堤によって池が二等分されていたと説明している。堤が2基あるということは、池が三等分されなければならないが、二等分として言及したことは、筆者の誤記なのか、堤のうち一つが護岸の壁に接していたため、二等分の状況を呈していたのか知ることはできない。博物館新聞に掲載された一枚の写真からは、これを確認するのは難しく、一旦、박방룡の論文に依拠し二等分として記した。
- 4 九黃洞苑池とは、二つの島の境界が西岸の突出部である点で差異がある。
- 5 安鶴宮の図面では、4基の島を確認することができる。真珠池でも4基の島が造成されたことをみれば、この二つの苑池の造営に共通の影響を与えた何らかの要因があったことが推測される。
- 6 古宮遺跡は推古天皇の小墾田宮として推定されてきたが、最近雷丘東方遺跡の発掘調査で‘小治田宮’と墨書された土器が10点以上発見されたことによって、古宮遺跡を小墾田宮と想定するのは難しくなった。よって、古宮遺跡は有力貴族の居宅遺跡と考えられてきており、このような観点から、‘豊浦大臣’としてみられてきた蘇我馬子の息子、蘇我蝦夷の居宅と古宮遺跡を推定する意見が説得力を与えている。地名の一致とともに、遺跡の状況をみると、居宅の規模と仏教的色彩がある庭園遺構の状況などから、この地域の強大な権勢を持っていた蘇我氏の居宅像と一致するとみられる。
- 7 『日本書紀』に齊明六年(660)には‘石上池’の傍に‘須彌山’を造り、肅慎47人を接待したと

いう記録があるが、この‘須彌山’は明治年間に発掘された‘須彌山石’に推定されている。発掘された石組池が‘石上池’に該当する可能性を提示することとしたい。年代的に一致しているため、この方形池が記録にある石上池だとすれば、斉明朝の饗宴に関連した施設であることは間違いないであろう。

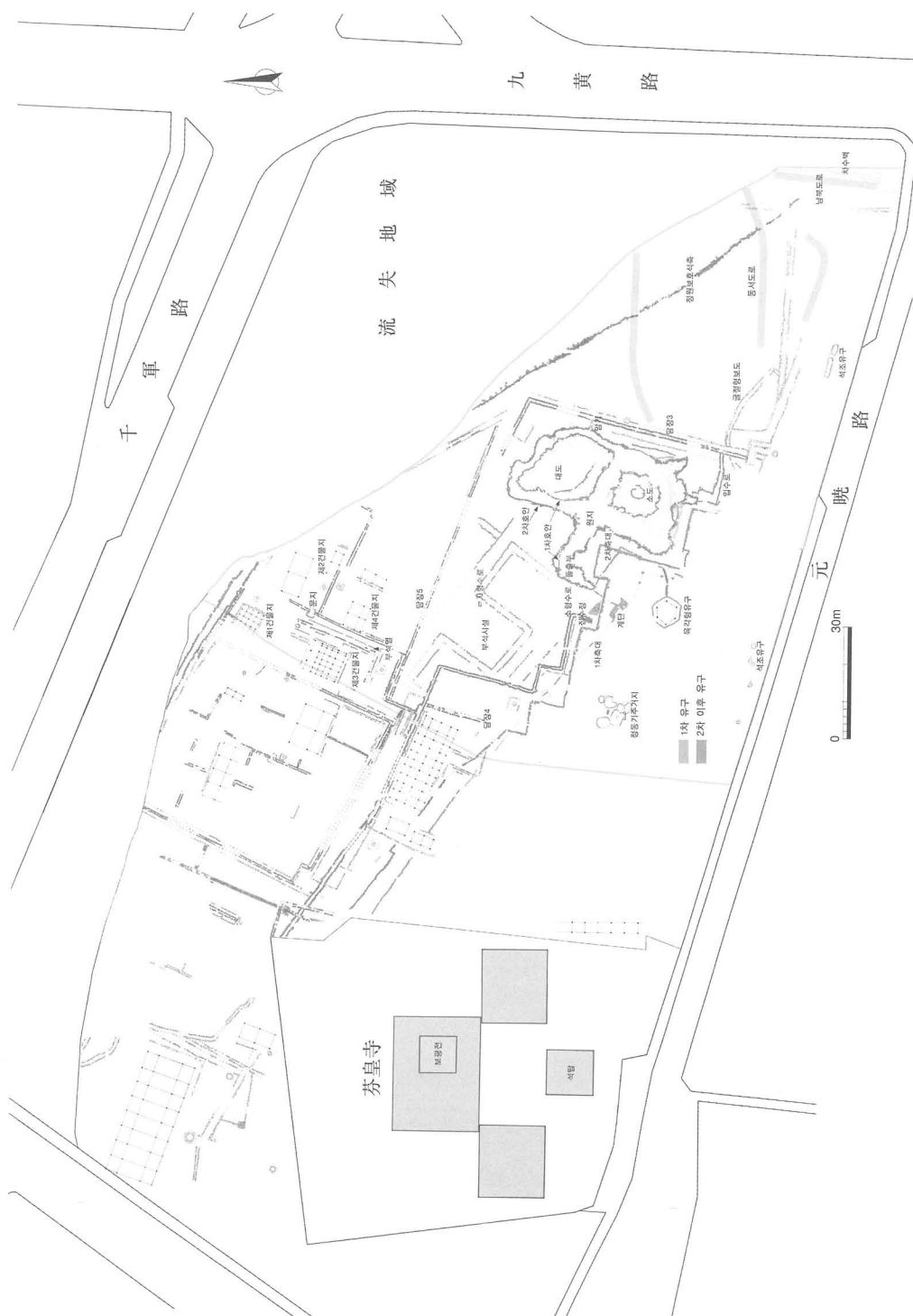
- 8 長屋王の佐保宅に対しては、大井重二郎による一条四坊付近説、大山誠一による鴻ノ池付近説に加え、左京三条二坊一・二・七・八坪とみる見解もある。『平城宮発掘調査報告VI』では、苑池から出土した三彩陶器の規格性が高く、多量の一括出土土器、天平初年頃から奈良時代末までの長期間この地域が使用されていないことなどの発掘成果をとおして、親王級の身分を持つ点から、当時に佐保に苑池をともなう居宅を造営し、神亀六年（天平元年、729）に謀反の嫌疑で自決した長屋王として推定されている。
- 9 持統天皇三年（689）の草壁皇子薨去の際の挽歌（巻2／170・181・185など）にみえる‘草壁皇子の島の宮の庭園’。
- 10 東岳－明活山、西岳－仙桃山、南岳－南山、北岳－小金剛山。
- 11 2006年芬皇寺の発掘当時、九黄洞苑池1、2次築台と連結するものと推定された築台が発掘された。よって、苑池遺跡で調査された築台が、芬皇寺寺域の北側まで連なっていることを確認したことになる。
- 12 오승연 前掲註2論文。
- 13 平城宮内に造酒司があった位置にある遺構で、儀式用の酒を醸造する際に使用した特殊な遺構と推定されている。
- 14 三ツ寺I遺跡は、5世紀後半の豪族居館として知られている。

参考文献

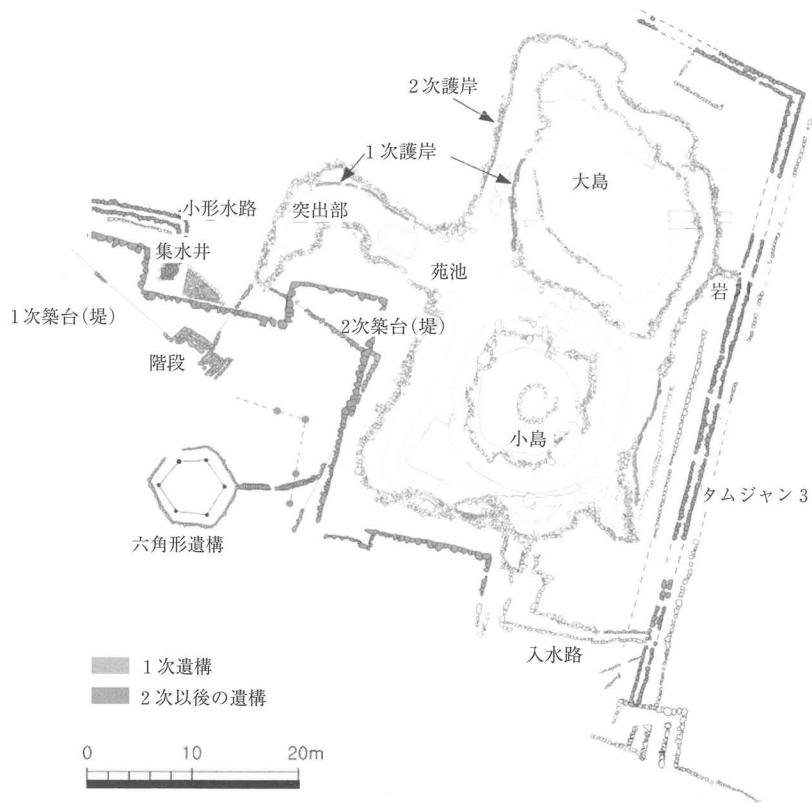
(1) 単行本

- 정동우 『한국의 정원－韓國園林研究－』 민음社、1988。
- 정재훈 『新羅 東宮의 苑囿인 雁鴨池』 환경과 조경38、1990。
- 정재훈 『韓國傳統의 苑』 도서출판 조경사、1992。
- 국립경주문화재연구소「慶州 九黄洞 皇龍寺址 展示館 建立敷地内遺蹟」발굴조사 지도위원회 의자료、2004。
- 국립경주문화재연구소「芬皇寺 발굴조사보고서 I」2005。
- 국립부여문화재연구소「익산 왕궁리유적-제18차 조사-」현장설명회자료、2006。
- 김일성종합대학출판사「대성산성의 고구려유적」1973。
- 문화재관리국『佛國寺』1976。
- 문화재관리국『雁鴨池』1978。
- 영남문화재연구원「慶州龍江洞苑池遺蹟」2001。
- 윤무병 『夫餘官北里 百濟遺蹟發掘報告（I）』충남대학교박물관、1985。
- 정양모・강우방「新築 慶州博物館 新羅時代遺構 第一次調査」박물관신문43호、국립중앙박물관、1974。
- 정양모・강우방「新築 慶州博物館 新羅時代遺構 第二次調査」박물관신문45호、국립중앙박물관、1975。
- 檀原考古学研究所『発掘された古代の苑池』学生社、1990年。
- 群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、東日本旅客鉄道株式会社『三ツ寺I遺跡－古墳時代居館の調査－』上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第8集、1988年。
- 金子裕之『古代庭園の思想－神仙世界への憧憬－』角川選書、2002年。
- 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告I』奈良文化財研究所学報第27冊、1976年。

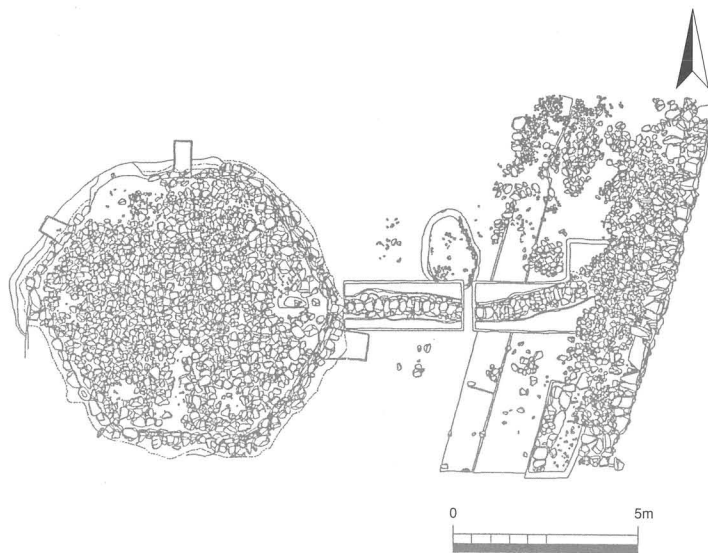
- 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』14、1984年。
奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』17、1987年。
奈良国立文化財研究所『平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1994年。
奈良文化財研究所『古代庭園研究 I - 古墳時代以前～奈良時代 -』, 奈良文化財研究所学報 第74冊、2006年。
奈良国立文化財研究所『発掘庭園資料』, 奈良文化財研究所史料第48冊、1998年
奈良県立橿原考古学研究所「明日香村 飛鳥京跡-鳥庄遺跡および第20～22次 飛鳥京跡第114次発掘調査概報-」『奈良県遺跡調査概報』、1989年。
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『水と祭祀の考古学』学生社、2005年。
桜井市教育委員会『奈良県桜井市阿部丘陵遺跡群』1989年。
- (2) 論 文
- 박경자「雁鴨池 造成計劃에 關한 研究 -한·중·일 고대 원지 비교연구를 중심으로-」서울대학교 대학원 박사논문、2001。
박경자·양병이「한·중·일 고대 원지의 비교연구-입지, 기능을 중심으로-」『한국정원학회지』Vol.18 No.3、2000。
백지성·하진호「경주시 용강동 정원유적의 원지구성에 관한 기초적인 연구」『한국정원학회지』Vol.20、2002。
안계복「안압지 경관조성의 배경원리에 관한 연구(I) -역사적 사실에 기초한 시대적 배경-」『한국정원학회지』17(4)、1999。
오승연「韓國 古代 宮苑池에 關한 研究」동아대학교대학원 석사학위논문、2002。
윤국병「고구려 안학궁정원에 관한 연구」『한국정원학회지』1권4호、1985。
이 송「韓國古代庭苑과 日本古代庭園과의 比較研究」『한국정원학회지』1권3호、1984。
정재훈「新羅 宮苑池인 雁鴨池에 대하여」『한국정원학회지』6호、1975。
홍광표「佛國寺 蓮池에 關한 一考察」
龜田 博「飛鳥地域の苑池」『橿原考古学研究所論集第九』創立五十周年記念、吉川弘文館、1988年。
猪熊兼勝「飛鳥・藤原園池遺跡」『仏教芸術』109、毎日新聞社、1976年。
田中哲雄「平城京跡左京三条二坊六坪の庭園遺跡」『仏教芸術』109、毎日新聞社、1976年。
田中哲雄「発掘された庭園」日本の美術2、至文堂、2002年。
秋山日出雄「飛鳥鳥庄苑池遺跡」『仏教芸術』109、毎日新聞社、1976年。



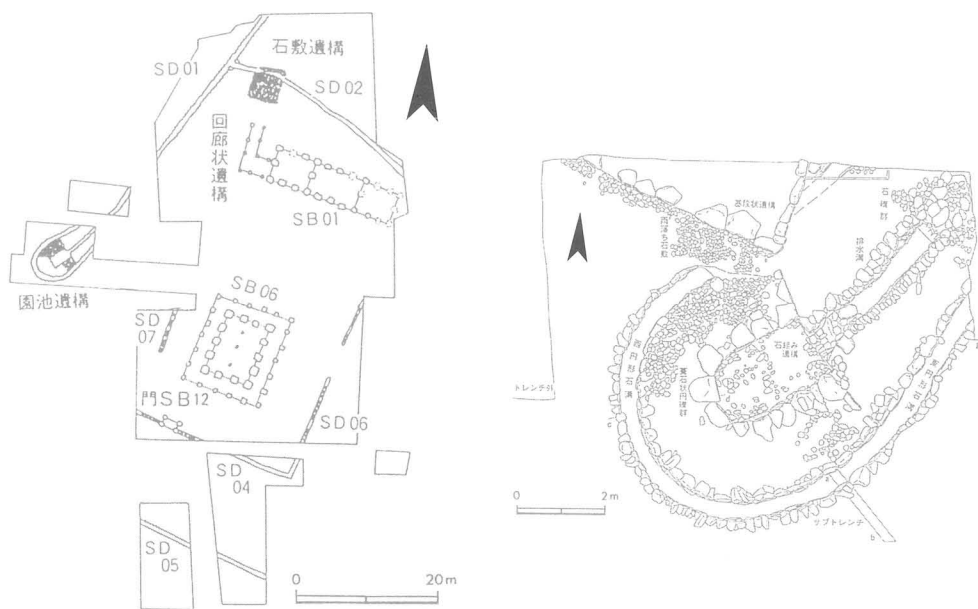
第 1 図 九黃洞苑池遺構現況図



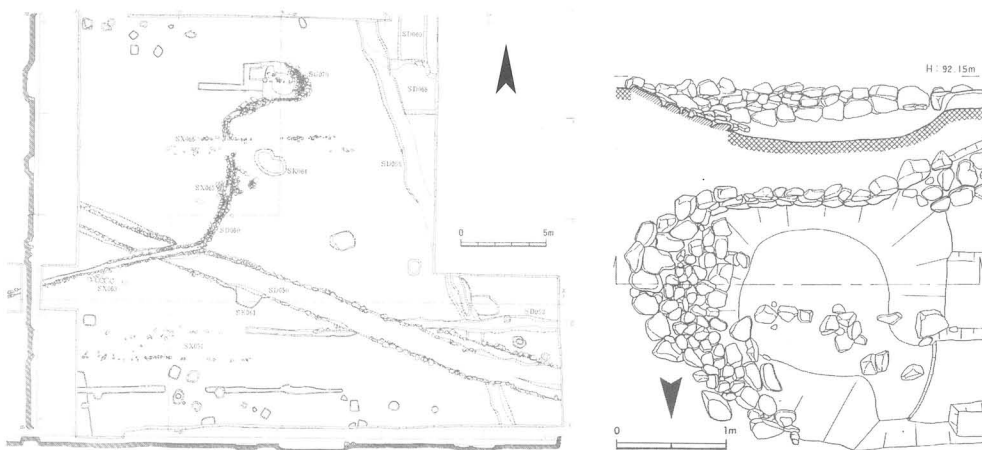
第2図 九黄洞苑池遺構



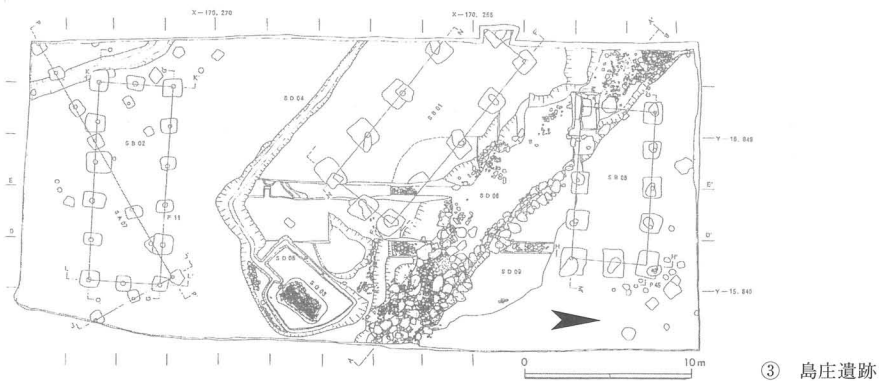
第3図 九黄洞苑池の六角形遺構



① 上之宮遺跡庭園遺構

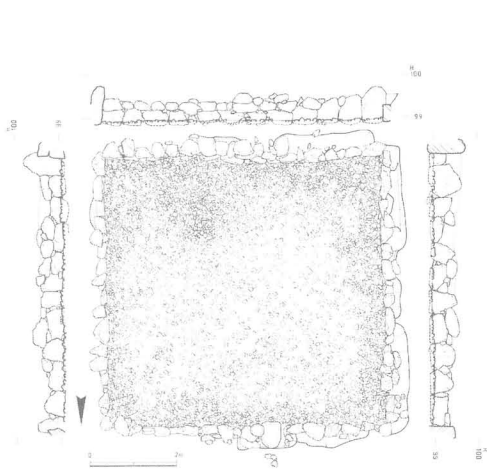


② 古宮遺跡

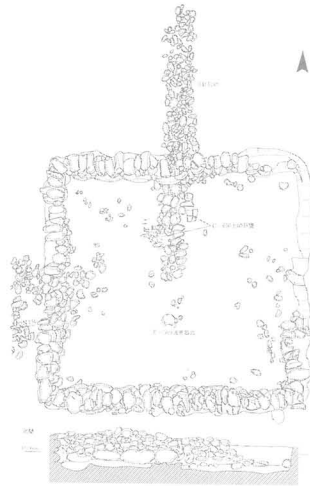


③ 島庄遺跡

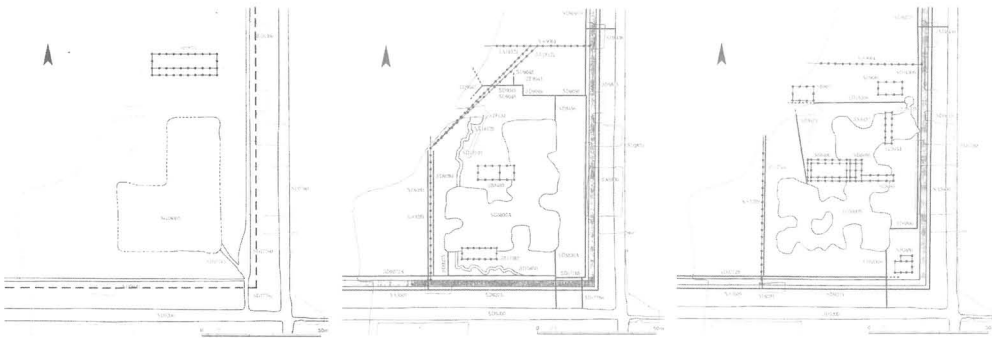
第4図 日本の主要苑池



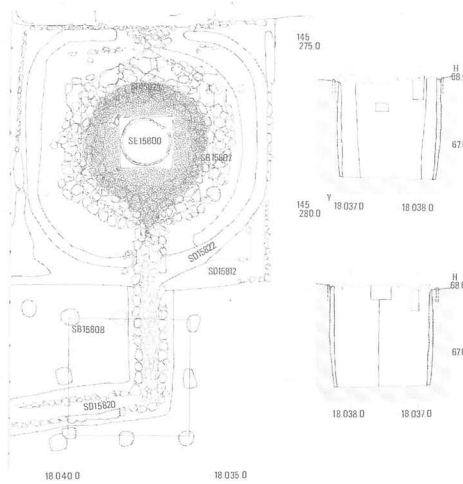
① 石神遺跡



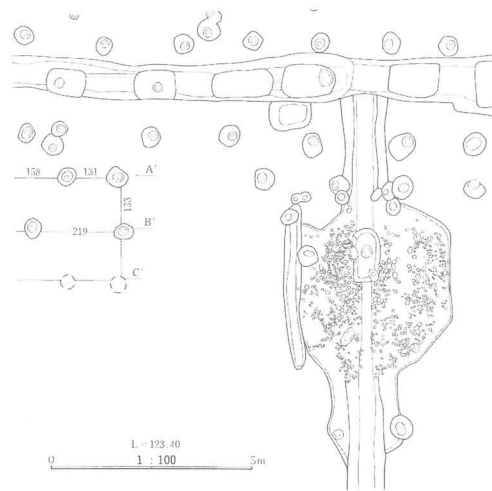
② 郡山遺跡



③ 平城宮跡東院庭園 (最下層・下層・上層遺構)



④ 平城宮造酒司の井戸



⑤ 三ツ寺I遺跡の石敷遺構

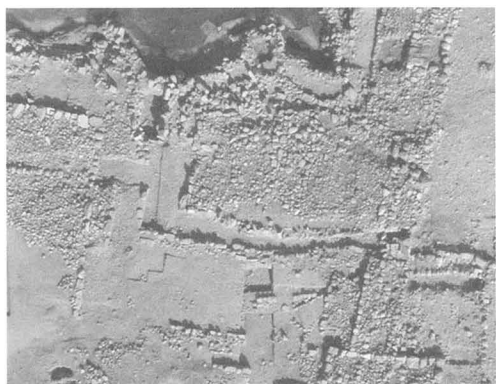
第5図 日本の主要苑池および関連遺構



第 6 図 九黄洞苑池全景



第 7 図 九黄洞苑池



① 入水部



② 入水部閉塞施設



③ 出水部



④ 「己」字形水路

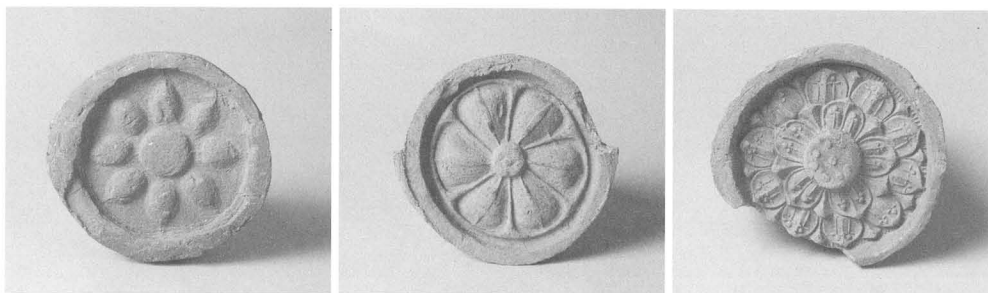


⑤ 六角形遺構



⑥ 貯水池（集水井）および小形水路

第8図 九黄洞苑池各部



① 単弁蓮華文軒丸瓦

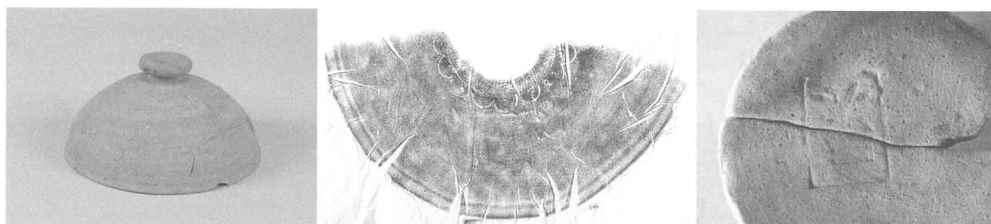
② 単弁蓮華文軒丸瓦

③ 複弁蓮華文軒丸瓦



④ 複弁蓮華文軒丸瓦

⑤ 鴨形角杯



⑥ 印花文土器

⑦ 「芬王」銘土器



⑧ 金銅板菩薩坐像 (右：雁鴨池出土)



⑨ 青銅神將像

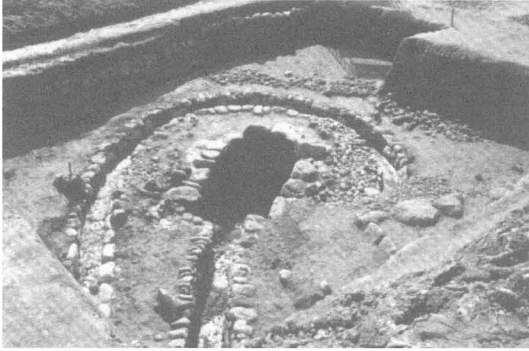
第9図 九黄洞苑池出土遺物



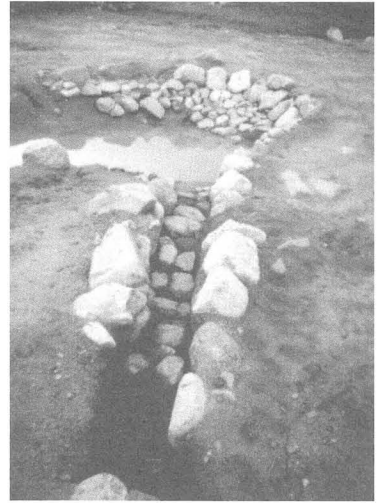
第10圖 益山王宮里遺跡庭園遺構全景



第11圖 益山王宮里遺跡庭園遺構細部



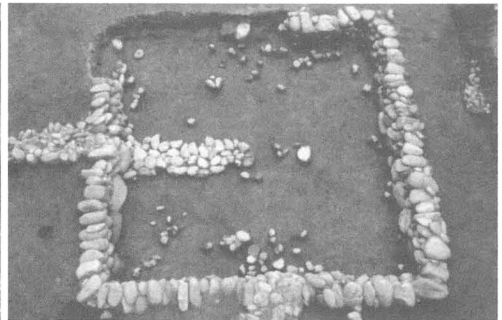
① 上之宮遺跡庭園遺構



② 古宮遺跡



③ 石神遺跡



④ 郡山遺跡

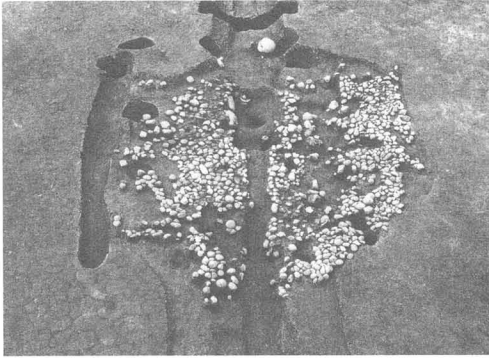


⑤ 平城宮跡東院庭園



⑥ 平城京跡左京三条二坊六坪庭園

第12図 日本の主要苑池



① 三ツ寺 I 遺跡の石敷遺構



② 平城宮造酒司の井戸



③ 中国ギジル千佛洞第118窟券頂北側壁菱形格壁画

第13図 日本苑池の関連遺構

한일 고대 원지의 변화를 통해 본 구황동 원지의 성격 연구

朴 玗 貞

요 지 한국의 고대 정원유적의 전반적인 흐름에 대해서는 이야기가 되어왔지만, 세부적인 형식변화를 시도한 예는 극히 드물다. 이는 발굴된 유적이 많지 않은 이유도 있지만, 정원유적이 갖는 다양성 때문일 것이다. 다양성의 원인으로서는 불교, 도교, 신선사상 등 당시 사회를 풍미했던 철학적 사상과 정원을 아름답게 꾸미고자 하는 조성자의 감성, 그리고 원지가 들어서는 지역의 지형과 풍경을 들 수 있다. 물론 그 감성과 취향은 당시 유행한 사상의 영향을 벗어날 수는 없겠지만, 정원유적이 동시대에 다양한 양상을 띠는 것도 이러한 이유 때문이다. 많은 유적들이 발굴된 일본의 고대 정원의 경우에도 方池를 제외한 曲池의 경우는 몇 가지 공통된 점 이외에는 다양한 형태를 보이고 있다. 한국의 고대 원지는 이른 시기부터 방지와 곡지가 동시에 나타나고 있다. 고구려와 백제는 방지의 비율이 높고 신라는 곡지의 비율이 높은 편이다. 곡지는 외형이 주는 화려함으로 인하여 궁, 왕실관련 사찰 등과 같은 주요한 건물 등에서 주로 채용되었으며, 방지는 조경용도 있지만 주로 궁, 산성 등에서 저수를 위해 사용되거나 사찰 내 影池로 채용되었던 것으로 보인다. 일본의 경우는 아스카시대에는 백제의 영향을 받은 방지가 주류이며, 분수시설이나 석조물 등으로 방지 내부를 꾸며 조경의 시야가 방지 내부로 집중시킨 반면, 한국의 경우는 주변의 자연과 조화를 이루어 조경의 시야가 원지 내부에서 주변경관까지 포함하는 보다 넓은 시야를 가졌다. 일본도 나라시대가 되면 방지는 사라지고 곡지 일색이 되면서 자연풍경식으로 바뀌게 된다. 구황동 원지는 이러한 원지의 흐름 속에서 수로가 강조되는 특징을 가진 형태로 판단되며, 최근 발굴조사된 백제 왕궁리유적과 일본의 아스카시대 원지 일부도 역시 같은 맥락에서 파악되어야 할 것으로 보인다.

키워드 : 구황동 원지, 정원, 육각형유구

The Study of Gardens and Ponds in Guhwangdong on Changes of those in Korea-Japan Ancient Times

Park, Yun Jung

Abstract : It has already been said of general flow of Korea ancient garden remains, but very few of detailed change of their forms, which is presumed to due to the diversity of garden remains, of course was not so much quantity of excavated remains. The reasons of diversity example philosophical thoughts of Buddhism, Taoism, Supernatural being, etc. overwhelming the society of those days, sensitivities of gardeners who were intending to beautifully lay out gardens, and various natural features, which was a major cause of the variety although not largely deviated from the influence of thought prevalent on the time. The cases of Japanese ancient garden having many relics show various forms except some common points in the case of natural ponds not being square ponds. Korea ancient gardens and ponds show the square and at once natural ponds from the early stage. Koguryo and Baekje are at high rate in square ponds, while Silla is in natural ponds. The natural ponds were mainly used for prominent buildings such as palaces, royal household-related temples, etc. due to their splendid shape and the square ponds were used for landscape, reservoirs at palaces, castles on the hills or the ground of temples. In the Asuka age of Japan, square ponds were the mainstream influenced by Baekje, which focused toward their center with having fountains and stonework in the inside, while Korea had the broader outlook with joining the inside of pond together with the nature round about. Up to the Japan Nara age, square ponds disappeared and natural ponds exclusively occupied as the natural scenery. The gardens and ponds in Guhwangdong, Korea is estimated of having features emphasizing the waterway in such ancient flow, and those of Wanggungri remains recently excavated in the Baekje of Korea and some in the Asuka of Japan would be understood as the same line of connection with them too.

Keywords : Gardens and ponds in Guhwangdong, gardens, sexangular remains